

# 太田横穴群発掘調査報告書

1982年9月

島根県 三刀屋町教育委員会

# 太田横穴群発掘調査報告書



1982年9月

島根県 三刀屋町教育委員会

## 序

三刀屋町における古墳・横穴の数は多く、すでに十指に余る所在が確認されております。しかし、残念なことには、いずれも古く開口したものばかりであって、今回の太田横穴群のように保存状態がきわめて良好なものは初めてであります。

ご承知のように、本町では宮田遺跡・松本古墳群など、縄文時代から古墳時代はじめにかけての遺跡については本格的な調査例があります。しかし、横穴についてはそれがなく、このたびの発見を好機に、その空白を埋める意味からも、入念な調査を実施いたしました。おかげさまで、本町の古代史解明のうえでまたひとつ新たな成果をあげることができたことを、大きなよろこびとするものであります。

最後になりましたが、調査にあたりまして多大のご指導、ご協力を賜わりました島根県教育委員会をはじめ、土地所有者ならびに関係者の各位に深甚なる謝意を表し、序といたします。

昭和57年9月1日

三刀屋町教育委員会

教育長 古瀬 明

## 例　　言

1. 本書は、島根県飯石郡三刀屋町殿河内地内の農道新設工事に伴って発見された横穴群の発掘調査記録である。なお、併せて周辺地域の遺跡を紹介し、三刀屋川流域における原始・古代の地域的把握に務めた。

2. 調査は、三刀屋町教育委員会が主体となり、昭和57年5月31日から6月7日までの延べ8日間実施した。調査体制は以下のとおりである。

調　　査　　員　　西尾克己（島根県教育委員会文化課主事）

　　　　　　　赤沢秀則（島根大学法文学部研究生）

調査補助員　　稻田信（島根大学法文学部学生）

調　　査　　協　　力　　大國晴雄（大田市教育委員会主事）、足立克己（島根県教育文化財団職員）、  
丹羽野裕（島根県教育委員会文化課主事）

事　　務　　局　　永塚久守（三刀屋町教育委員会係長）

3. 調査にあたっては、地主である柿木吉一氏をはじめ、加藤陽一、重富福太郎、広沢英雄、森山崇の諸氏および株式会社都聞土建に協力を得た。記して謝意を表す。

4. 本文は、永塚、西尾、赤沢、足立、丹羽野、稻田が分担執筆し、執筆者名は章、節の後に記した。

図版、写真撮影は永塚をのぞく上記5名がこれにあたったが、写真の一部は有限会社井上松影堂にかかるものである。

5. 図版の方位は、縦て調査時における磁北である。

6. 出土品は、現在三刀屋町永井記念館にて保管している。

# 目 次

序	
I 調査に至るいきさつ	1
II 歴史的環境	2
III 太田横穴群の概要	4
1号穴	4
2号穴	10
小結	18
(附編) 周辺地域の遺跡紹介	20
浜遺跡	
横原遺跡	
宮内遺跡	
栗谷遺跡	
松本古墳群	
森谷横穴群	
栗谷横穴群	
神代横穴	

## 挿 図 目 次

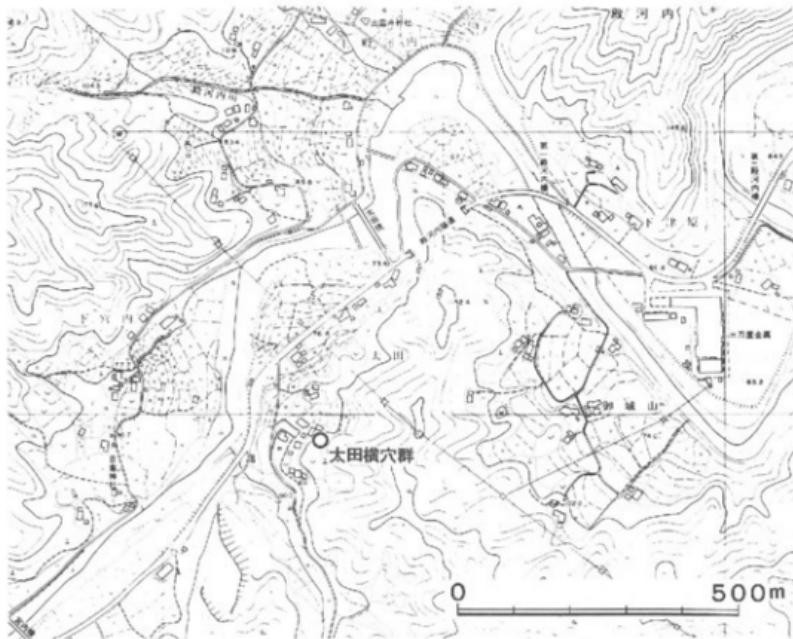
第 1 図	太田横穴群の位置図	1
第 2 図	太田横穴群と周辺の遺跡	3
第 3 図	太田横穴群配置図(1)	4
第 4 図	太田横穴群配置図(2)	5
第 5 図	太田横穴群 1 号穴実測図	7
第 6 図	太田横穴群 1 号穴遺物実測図	9
第 7 図	太田横穴群 2 号穴実測図	11
第 8 図	太田横穴群 2 号穴遺物実測図(1)	14
第 9 図	太田横穴群 2 号穴遺物実測図(2)	16
第 10 図	太田横穴群 2 号穴遺物実測図(3)	17
第 11 図	太田横穴群 2 号穴遺物実測図(4)	18
第 12 図	周辺遺跡出土繩文土器実測図(1)	22
第 13 図	周辺遺跡出土繩文土器実測図(2)	23
第 14 図	周辺遺跡出土繩文土器実測図(3)	24
第 15 図	周辺遺跡出土弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器実測図	29
第 16 図	周辺遺跡出土石器実測図(1)	30
第 17 図	周辺遺跡出土石器実測図(2)	31
第 18 図	宮内遺跡出土瓦実測図	31
第 19 図	松本古墳群墳丘実測図	34
第 20 図	松本 1 号墳出土土器実測図(1)	36
第 21 図	松本 1 号墳出土土器実測図(2)	37
第 22 図	松本 4 号墳出土土器実測図	37
第 23 図	森谷横穴群実測図	42
第 24 図	栗谷横穴群 3 号穴実測図	43
第 25 図	栗谷横穴群 4 号穴実測図	44

## I 調査に至るいきさつ

太田横穴群は、飯石郡三刀屋町大字殿河内字太田に所在し、昭和57年5月25日工事中に偶然発見された遺跡である。長年にわたる山崩れなどによって、横穴の入口付近が完全に遮蔽されたまま今日に至ったものであり、したがって遺跡の存在はまったく知られていなかつた。それが、圃場整備事業に伴う作業道新設工事の途中、重機による山腹の掘削作業によって開口、発見されたものである。

土地所有者及び工事関係者から連絡を受けた三刀屋町教育委員会は5月26日現地踏査を行い、2穴を確認、直ちに島根県教育委員会文化課の協力を得て、5月31日から6月7日まで発掘調査を実施した。

(永塚)



第1図 太田横穴群の位置図

## Ⅱ 歴史的環境

中国山地に端を発し、山合いを蛇行しながら多くの支流を合せつつ奥出雲を貫流する斐伊川流域には、随所に平坦な段丘地形がみられる。そこは、原始から現代に至るまで主要な生活・生産の場であった。三刀屋町においても、太田横穴群から見渡せる三刀屋川、及び山塊をはさんで東側を流れる飯石川、両河によって形成された段丘上に点々と遺跡が認められる。

**縄文時代** この地域において、現在認めうる最も古い生活の痕跡は、縄文時代早期にさかのぼる。この時期の遺物は、浜遺跡（第1・2図）において分厚の尖底土器や繊維混入土器など、およそ早期後葉の土器がまとまって採集されている。

中期の上器も、わずかに認められるが、後期・晩期になると、遺跡・遺物ともに増加する。すなわち、三刀屋引附跡の柳原遺跡（第13図）、浜遺跡、宮内遺跡（第12～14図）、飯石川流域の栗谷遺跡（第14図）、埋藏構造で知られる宮田遺跡等において、相当の遺物が出土している。

一方、当時の生産活動を知る手がかりとなる石器類も数多くみられる。石鎌、磨石類はもちろんのこと、石錐も相当量が採集・発掘されており、当時、川での漁労活動もかなりの比重を占めていたことがうかがえる。また土掘り具と推される偏平打製石斧も出土しており注目される。

**弥生時代** この時期は、中・後期の土器が三刀屋川段丘上から点々と採集されている。また、打製石庖丁様の石器、及びその未製品と考えられるものが數点みられる。これが実際に櫛の穂先具として用いられたかどうか断言はできないが、中部瀬戸内地方に通有の打製石庖丁に類似しており、また石材も、他の地域や他の石器では例をみない頁岩を利用しておらず、非常に興味深い。

**古墳時代** 古墳時代前期、三刀屋川をやや下流に下った給下の丘陵上に突如、大形の前方後方墳の松本一号墳（全長50m、粘土構成主体、船載鏡等副葬、第19図）が築造される。この古墳は、赤川流域の神原神社古墳と比肩する、三刀屋・木次一帯を支配した首長墓である。しかし、古い時期の古墳はこれ一基のみで、それ以後目立った古墳は築造されなかった。一方、後期になると多くの横穴がみられる。これらの横穴は、太田横穴群と同様、段丘平面を見下ろす丘陵斜面に穿たれており、しかもある程度の広さをもった段丘単位に造られているようで、その被葬者を考えるうえで示唆的である。石室をもつ古墳には、陶器をもつ松本四号墳や馬具を副葬する岩広古墳が知られるが、その数は極めて少ない。

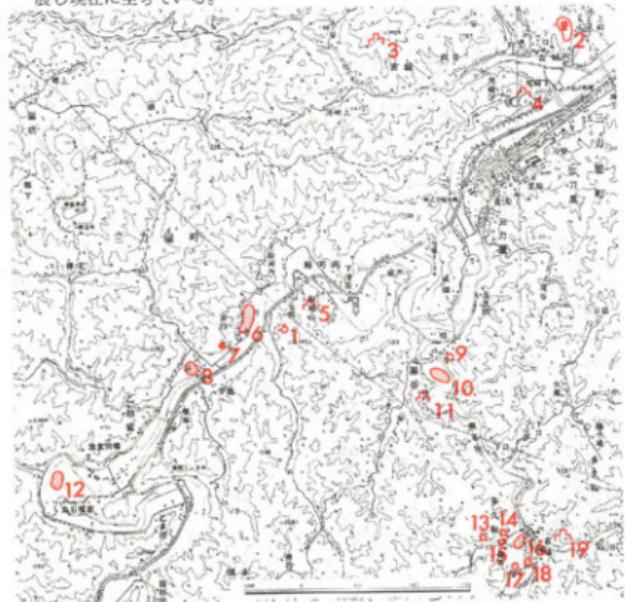
一方、集落は前代と同様に段丘上に存在したようだ、柳原、浜、宮内、栗谷等の遺跡で、多くの土師器、須恵器が採集されている。なお、未知ではあるが、松本一号墳の存在を考慮に入れるとな、下流のやや開けた平野には、弥生時代から古墳時代にかけての相当な集落が存在したことは想像に難くない。

奈良時代及びそれ以降 『出雲國風土記』( 733年 )によると、本遺跡周辺部は飯石郡三屋郷、飯石郷に属する。奈良時代にはほぼ三刀屋川にそって当時の幹道である通道が通っていたと考えられ、三屋郷には正倉も設置されていた。また、やや下流の熊谷には「熊谷車團」も置かれていたらしい。前述の宮内遺跡において、布目瓦が採集されており、そこに官衙遺構か寺院跡かが存在した可能性もあるが、詳細は未だ不明といわざるをえない。

段丘平面上には、この時期の須恵器・土師器がみられ、引きつき集落が営まれていたことがわかる。なお、この時期の須恵器のなかには、平野部にはみられない大粒の川砂を含んだものもあり、周辺に須恵器窯跡が存在した可能性もある。

中世以降については詳細は不明であるが、室町時代になるといくつか山城が築かれた。すなわち、交通の要地をおさえるかたちで、三刀屋川を見おろす殿河内の地に御城山城、飯石川を見おろす栗谷の地に栗谷城、そして現在の三刀屋の中心街を見おろして三刀屋城がそれぞれ築かれたのである。これらの城は少なくとも17世紀には廃城となり、後、この地は交通の要地として発展し現在に至っている。

( 丹羽野 )



第2図 太田横穴群と周辺の遺跡

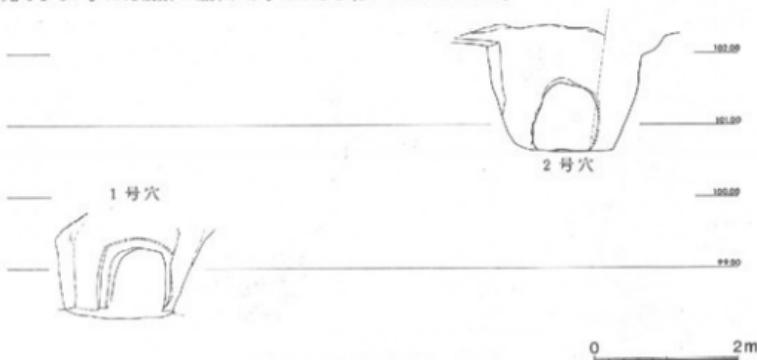
1. 太田横穴群
2. 松本古墳群
3. 蛇山城跡
4. 三刀屋城跡
5. 御城山城跡
6. 宮内遺跡
7. 宮内古墳
8. 浜遺跡
9. 栗谷横穴群
10. 栗谷遺跡
11. 栗谷城跡
12. 横原遺跡
13. 森谷横穴B群
14. 森谷横穴A群
15. 森谷川遺跡
16. 宮田遺跡
17. 古殿遺跡
18. 京殿遺跡
19. 多久和城跡

### III 太田横穴群の概要

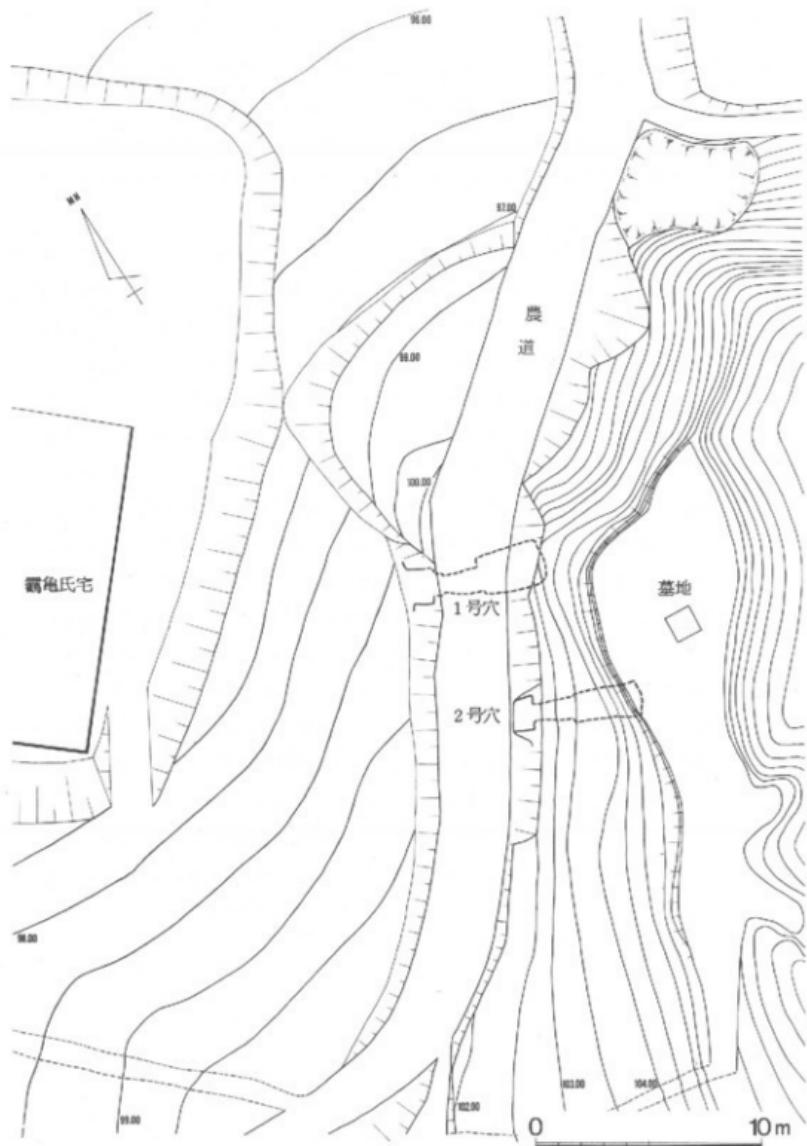
太田横穴群は、調査を行った2穴が確認されているが、周辺にも横穴の存在が推定できる。ただし、周辺の地形からは、大規模な群構成はとらないようである。横穴は、北にあるものから1、2号穴とよび、1号穴と2号穴は直線距離にして6m、高低差は2mで2号穴の方が高い位置にある。

#### 1号穴

1号穴は、前庭に相当する部分が、畑として耕作されており、旧状を保ってはいないが前庭部に高さ1.2cmの段を有する。この段が横穴に関連するものか、後世の耕作に際して作られたものかは判然としない。羨道部の前端には、閉塞石などを受けるためと考えられる割り込みが見られ、これと対応するかのように人頭大の花崗岩が床面よりやや浮いた状態で見つかっている。これは板などで羨門部を閉塞した際の「おさえ」のための石かとも考えられるが、縦断セクションでは、そのような閉塞は観察できない。羨道は断面カマボコ状を呈し、やや長く北側で1.9m、南側で2.3mを測る。玄室は、縱長長方形のプランで、両袖ながら北側にやや深い袖を有している。天井は、いわゆる断面テント形で、奥壁はかなり前方にせり出している。玄室長2.90m、幅は奥壁部で、1.84m、玄門部で1.62mとなっている。高さは最も高い奥壁付近で、1.64m、最も低い玄門付近で、1.07mを測る。床面からは須恵器高环3点が検出されている。それ以外の遺物は検出されなかった。また、床面には7個の花崗岩の河原石が残っており、被葬者を納めた棺、あるいは被葬者を乗せた板の台と考えられる。しかし、その位置からは、棺や台の配置は復元できない。ただ複数の埋葬があったことを窺わせるのみである。



第3図 太田横穴群配置図(1)



第4図 太田横穴群配置図(2)

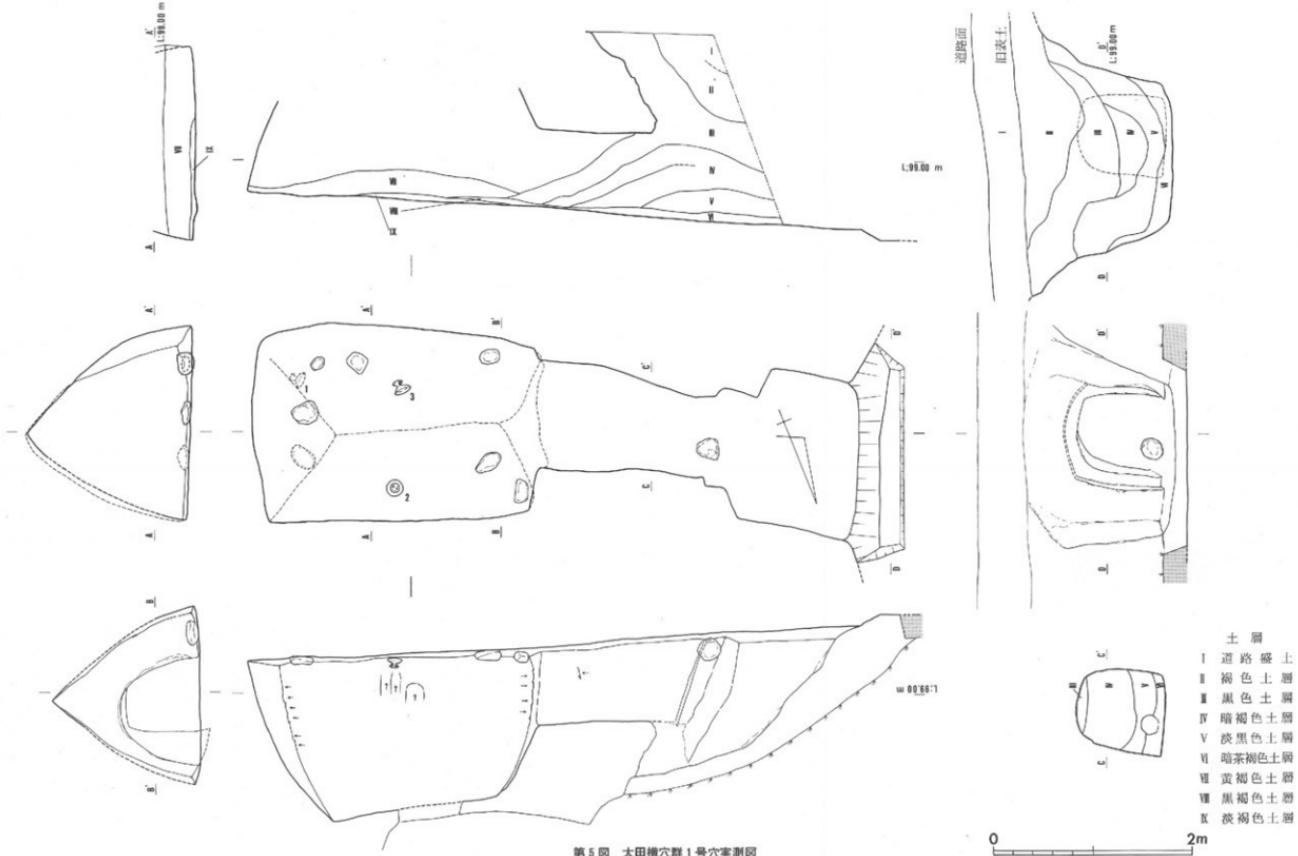
葬道から前庭にかけての土砂の堆積状況は、未開口と考えられる2号穴が、固く土砂をつき固めて閉塞してあったのに対し、1号穴の前庭堆積土は極めて軟質で、前底部横断セクションで暗褐色上の落ち込みが見られる。これは、玄室内の台石が散乱している状況などとあわせ考えて、後世の盗掘が想定できる。暗褐色上、黒色土層の落ち込みは、その際の盗掘坑の痕跡と考えられる。

また、玄室側壁および、葬道側壁に横穴を掘削した際の工具の痕跡が残っている。刃幅のわかる最小のもので7cm、最大のもので12cmである。一般にノミ痕と呼ばれてはいるが、壁面を削る方向からは、鋸状の工具を考えるのが妥当であろう。なお、刃幅の異なるものがあるので、何種類かの工具が工程によって使いわけられている可能性がある。

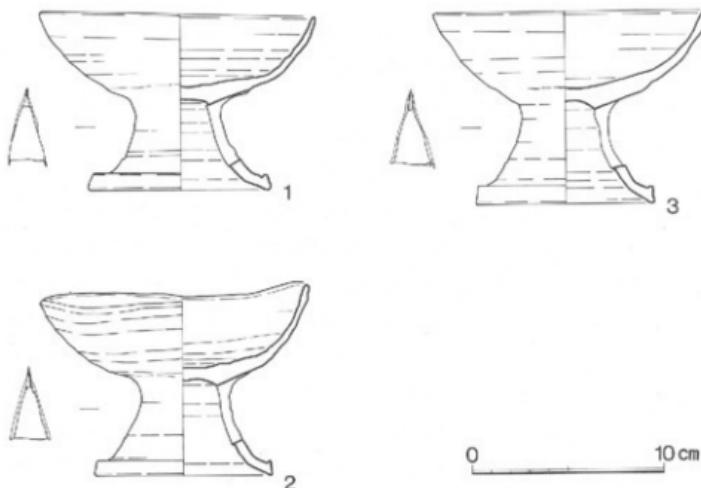
出土品としては、玄室内から須恵器高环が3点発見されており、いずれも完形品である。（第6図）うち第6図1は、横穴が工事中に開口した際、発見者によって持ち出されたもので、出土位置は確定できないが、大体の出土地点を第5図に示した。他の高环は、調査の際検出されたものである。それらは、玄室の中央部で発見され、2のものは、北側側壁付近で、倒立した状態、3のものは南側側壁より転倒した状態で発見された。なお、発見によれば、1の高环は、奥壁近くでやはり転倒した状態であったという。他に遺物は発見されなかった。

この3点の須恵器高环は、いずれもやや浅く、ゆるやかに開く環部、1段2方向三角形の透しを有し、端部で平坦な面をもつ短脚である他、環部口径も14.0～14.3cm、高さ9.2～9.5cmと、ほぼ同寸同大の製品である。いずれの製品も、环外面底部付近に环部と脚部の接合痕が確かに見える。透しは鋭利な刃物によって施されている。調整は、殆んど回転なのであるが、内面底部にのみなで調整が見られる。また、この部分には、重ね焼きによる色調の異なる部分があり、この痕跡は、高环脚端部の径に等しく、3点全てに認めることができる。

以上3点の須恵器高环は、同一の規格で製作され、おそらく同時に焼成されたものであろう。剖棄されたのも、初弃あるいは追弃のいずれかの段階で、一括して横穴内に納められたと考えるのが妥当であろう。山陰の須恵器編年では（注1）、Ⅳ期に含めうるものである。



第5図 太田横穴群1号穴実測図



第6図 太田横穴群1号穴遺物実測図

第1表 太田横穴群1号穴出土土器観察表

捕団番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・色調	備考
6-1	高环	口径14.2 器高 9.2	やや浅い环部。 脚に1段2方向 三角形の透し。	环部内面底部な で調整。他は全 て回転なし。外 面底部に环と脚 の接合痕が残る。	長石の砂粒目立 つ。石英微砂粒。 淡青灰色。	焼成普通。 完形。
2	高环	口径14.3 器高 9.5	やや浅い环部。 1段2方向三角 形の透し。	环部内面底部な で調整。他は全 て回転なし。外 面底部に环と脚 の接合痕が残る。	長石の砂粒目立 つ。淡青灰色。	焼成普通。环部 焼けひずむ。 完形。
3	高环	口径14.0 器高 9.3	やや浅い环部。 1段2方向三角 形の透し。	环部内面底部な で調整。他は全 て回転なし。外 面底部に环と脚 の接合痕が残る。	石英・長石など やや目立つ。 暗青灰色。	焼成やや甘い。 完形。

## 2号穴

2号穴は、農道の新設に際して、前庭部の前半が破壊され、道路側面の法面上に前庭の横断面が露出していた。西側に向かうゆるやかな斜面に横穴が穿たれていたものと思われる。

前庭部は道路工事により前方が破壊されてはいるが、約90cmが残存している。この部分に堆積した土砂のうち、暗褐色土層の上面から、須恵器片、同杯蓋、金環が出土している。後述するが、これらの遺物は、追葬の際に以前の副葬品を外部にかき出した際の遺物と考えられる。

羨門部分には、1号穴と異なり閉塞石などを受けるための刺込みはなく、羨道は、断面不整形なカマボコ状を呈し、長く約1.8mを測り、幅は、淡門部で約0.75m、玄門部で約1.0mと、奥へ行くほど広くなる。高さも羨門部で約0.88m、玄門部で0.92mと、高くなっている。

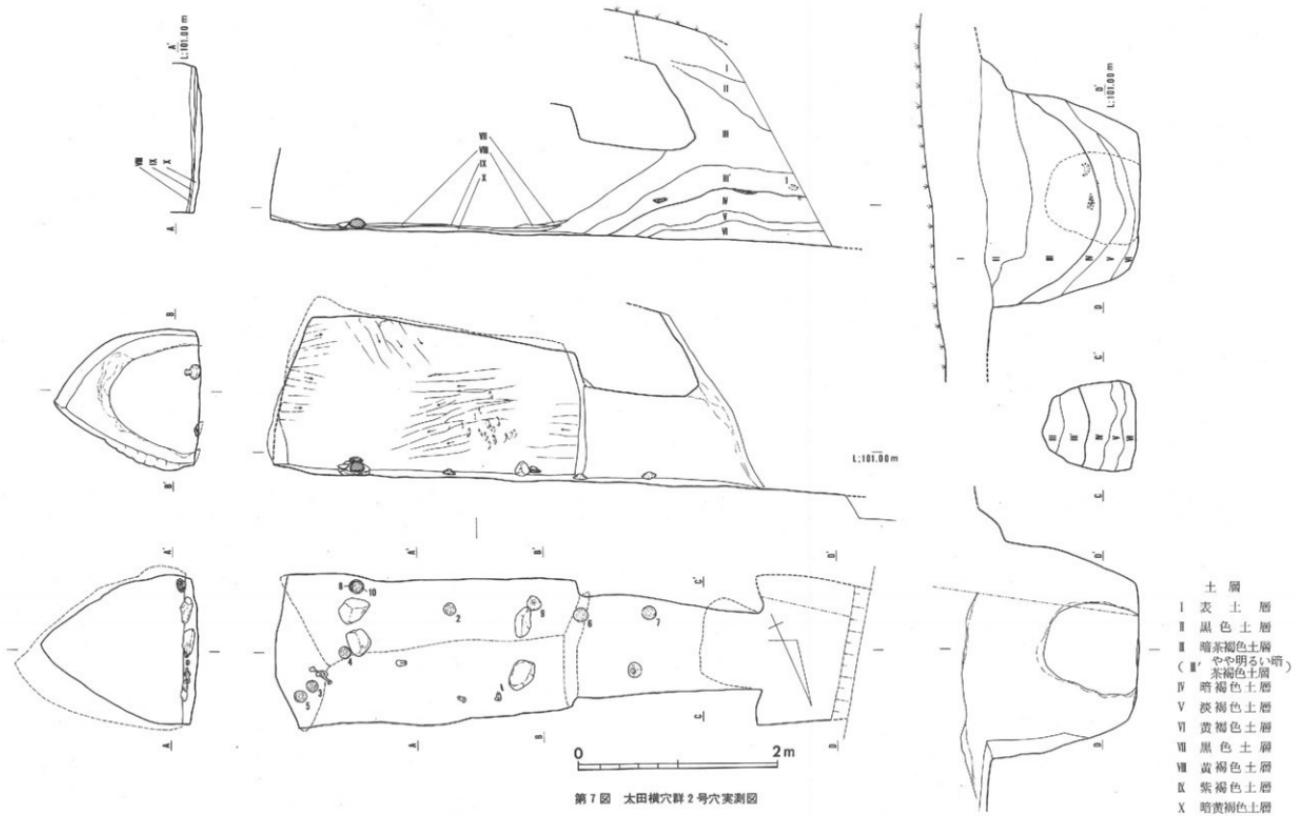
前庭部から羨道部にかけて堆積した土砂のうち、下層に堆積した、暗褐色土層から黄褐色土層にかけては、土砂が固くしまっていた。なかでも、淡褐色土層、黄褐色土層は、地山ブロックを多く含み、非常に固く、閉塞に際し、土砂を丁寧につき固めた状況が知られた。

玄室は、縦長方形のプランで、両袖ながら、わずかに南側の袖が深い。天井はいわゆる断面テント形で、奥壁は、やや前方にせり出している。玄室長3.04m、幅は、奥壁部で、1.54m、玄門部で1.25mとなっている。高さは、最も高い奥壁付近で、1.75m、最も低い玄門部分で、1.28mを測る。床面には花崗岩の河原石4個があり、配置から死者を乗せる板の台石であろうと推測される。この石は、暗褐色土層に乗っている。

暗褐色土層は、玄門付近で消失するが、これと対応するかのように暗褐色土層が始まる。この暗褐色土層上面と、上層のやや明るい暗茶褐色土層中には、金環、須恵器蓋および同片が含まれている。金環などは前庭埋土中から発見されるには異質の遺物であり、これらは、追葬の際に玄室内から、かき出されたものと考えられる。つまり、前庭、羨道部では、追葬に際しては、暗茶褐色土層と、やや明るい暗茶褐色土層の部分を掘削し、その際に玄室内に流入した土砂が、暗褐色土層であり、この層に乗る台石および、遺物は、追葬に伴うものと認めることができる。すなわち、玄室内の須恵器蓋壺7、巻1、鉢具2、刀子1がこれにあたるであろう。同様にこの追葬に際して掘削されなかった層に含まれる須恵器壺2、平瓶1は、初葬時の遺物と考えられる。

また、玄室側壁には、工具の痕跡が残っている。刃先の痕跡や、工具の動きから、この横穴掘削の仕上の段階にあたっては、U字形の刃先を装着した鍬が使用されたと考えられる。側壁の仕上は横方向のケズリが主で、縦方向のケズリを主とする1号穴の仕上とは異なり、注目される。

なお、2号穴は、破壊される心配がないため、後日再検討がなされることを考えて、前庭南側の土層觀察用の壁を掘り残した。



第7図 太田横穴群2号穴実測図

2号穴からの遺物は以下のとおりである。

玄室——須恵器（蓋4、环3）

鉄製品（轡1、鉸具2、鐵斧1、刀子1）

羨道部——須恵器（环2、平瓶1、甕片2）

前庭部——須恵器（蓋1、甕片多数）

金環1

これらの遺物は、横穴内各地点で検出されてはいるが、出土状況からセットになる蓋环などはない。属位的には、1類、追葬の際に前庭部にかき出された遺物（第8図1、第10図5）、2類、羨道部付近で追葬時には掘削されなかった層に含まれる遺物（第8図6、7、第9図1）、および3類、追葬時に對応すると考えられる暗黄褐色土層上にのる遺物（第8図2、3、4、5、8、9、10、第10図1、2、3、4、第11図）とに分類することが可能である。

須恵器については、3類のものは、环蓋いずれも薄手のつくりで、第8図2の例外を除くと、いずれも外面にヘラ記号をもつ。蓋は口縁近くで屈曲するものが多く、环は、11線の立ち上がりは低く内傾し、端部鋭い。ヘラ記号は「×」あるいは「/」である。

1類のものは、厚手の蓋で、3類のものなどと異なり、天井部から口縁部までなだらかに移行する。ヘラ記号などはない。

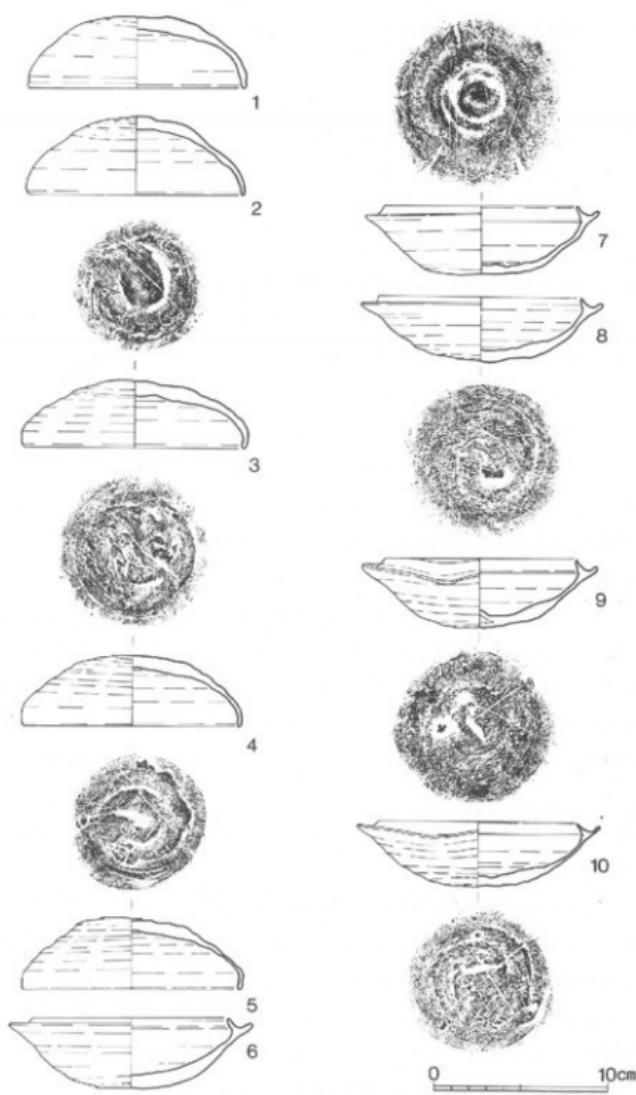
2類のものは、1類のものと酷似して厚手のもの（第8図6）と、全体に薄手で、内面に5本の平行線によるヘラ記号を有するもの（第8図7）の2点の身、および平瓶1点である。

その他、羨道および前庭部出土の甕片は、大甕の破片と考えられ、口縁部と胴部の破片を有する。胴部の破片は、いずれも外面に多数のきずをもつ。やや明るい暗茶褐色土層以上の層から、まんべんなく出土するので、初葬時に埋土上面に乗せられていたものが、追葬の掘削に際して、攪乱されたものと思われる。

鉄製品他は、玄室内から轡、鉸具、鐵斧、刀子が出土し（3類）、前庭部からは金環が出土している（1類）。

轡（第10図1）は、鉄製素環の鏡板をもつもので、衡の組違の部分を欠いてはいるが、ほぼ完形のものである。鏡板は、円形の環体に立闘が付く形式のもので、全長7.4cm、環体の幅5.4cm、立闘の幅3.1cmである。衡は、組違の部分を欠いているが、二連式のもので、復元長は、17.5cmである。衡と引手は直接連結され、鏡板の環体も衡の環体に連結する。引手は、長さ15.5cmで、引手座などはもたないが、手柄につながる小環は外反している。この小環の部分で鉄棒を曲げて接合した痕跡を見る事ができる。鉄棒の断面は、方形である。

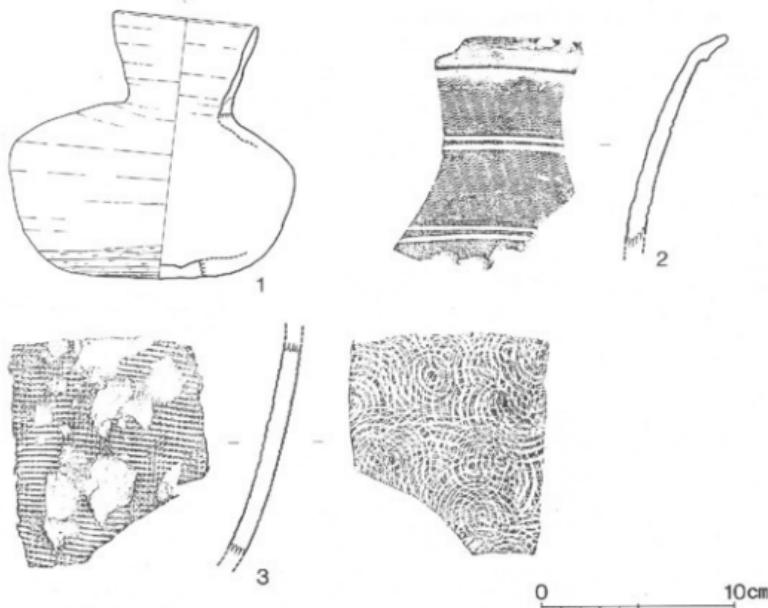
鉸具2点（第10図2、3）は、銹化が著しいが、大きさがほぼ等しく、剥金の下方の梢円形



第8図 太田横穴群2号穴遺物実測図(1)

第2表 太田横穴群2号穴出土土器觀察表

插図 番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・色調	備考
8-1	蓋	口径 12.5 器高 4.2	全体にやや厚手。口 脣端部外面に凹縫が めぐる。	外面天井部はへらお こし。他は回転などで。 内面天井部などで調整。 他は回転などで。	長石目立つ、密。 淡青灰色。	焼成良好。
2	蓋	口径 12.4 器高 4.6	やや厚手。天井部は 脣端から屈曲してわ ずかに立ち上がる。	外面天井部はへらお こし。他は回転などで。 内面天井部などで調整。 他は回転などで。	石英、長石などやや 多い。 淡青灰色。	焼成普通。 完形。
3	蓋	口径 12.7 器高 3.9	やや厚手。器高低く、 口脣端が内溝する。	外面天井部はへらお こし。他は回転などで。 内面天井部などで調整。 他は回転などで。	長石多い。 青灰色。	焼成良好。 完形。 外面天井部に「△」のヘ ラ記号あり。
4	蓋	口径 12.5 器高 4.1	やや薄手。器高低く、 口脣端が内溝する。	外面天井部はへらお こし。他は回転などで。 内面天井部などで調整。 他は回転などで。	長石が目立つ。 淡青灰色。	焼成普通。 完形。 外面天井部に×のヘ ラ記号あり。
5	蓋	口径 12.6 器高 4.2	器壁薄い。器高低く、 口脣端が内溝する。	外面天井部はへらお こし。他は回転などで。 内面天井部などで調整。 他は回転などで。	長石目立つ。 外面／黒灰色。 内面／灰色。	焼成良好。 口脣部を わざかに欠く。 外面天井部に△のヘ ラ記号あり。
6	坏	口径 11.4 器高 4.1	器壁厚い。内外面とも 凹凸少ない。立ちあ がり低い。	外面底部はへらおこ し。他は回転などで。 内面底部などで調整。 なで調整の面積広い。 他は回転などで。	石英、長石は黄砂粒。 金星母目だつ。 灰色。	焼成良好。完形だが、 口脣 2ヶ所に焼成時 のヒビあり。
7	坏	口径 11.2 器高 4.0	器壁薄く、器高低く。 立ちあがり低く、そ の内面基部に1条の 沈縫を施す。	外面底部はへらおこ し。他は回転などで。 内面底部などで調整。 他は回転などで。	長石目立つ。 青灰色。	焼成良好。 完形。 内面底部に△のヘ ラ記号あり。
8	坏	口径 11.7 器高 3.8	器壁やや薄く、器高 低い。立ちあがり低 く、断面鋸歯。口脣 やや大きい。	外面底部はへらおこ し。他は回転などで。 内面底部などで調整。 他は回転などで。	石英、長石多い。 淡青灰色。	焼成良好。外面灰被 り。完形。 外面底部に×のヘラ 記号あり。
9	坏	口径 11.0 器高 4.0	器壁やや薄く、器高 低い。立ちあがり低 く、断面鋸歯。	外面底部はへらおこ しの後なでる。内面 底部などで調整。他は 回転などで。	長石目立つ。 青灰色。	焼成良好。外向灰被 り。完形。 外面底部に×のヘラ 記号あり。
10	坏	口径 11.4 器高 3.8	器壁薄い。器高低く。 立ちあがり低く、断 面鋸歯。	外面底部はへらおこ しの後、工具でなでる。 内面底部などで調整。 他は回転などで。	長石目立つ。 淡青灰色。	焼成良好。外面灰被 り。完形。 外向灰被り。外 面底部に×のヘラ 記号あり。
9-1	平底	口径 7.5 器高 13.7 胴部最大径 14.8	胴が大きく張り、器 高が低く安定性がよ い。腹部は体部の中 心よりやや外に付く。	肩部と口脣部の境に 接合痕が残る。外 面底へう削り。その 他回転などで。	長石目立つ。 青灰色。	焼成良好。 完形。
2	壺	—	口脣部は外反する。 やや薄手で、シャー プなつくり。	外面上、下二段の 波状文帯をもち、そ れぞれの下方に2本の 凹縫を施す。内面 と外面口脣部回転で て。	長石目立つ。 淡青灰色。	焼成普通。 図-3と同一個体。
3	壺	—	丸味をもつ胴部の破 片。形態定かでない。	外面部格子状のタタキ が付在する。内面同 心円文のタタキが付 在する。	長石目立つ。 淡青灰色。	焼成普通。 図-2と同一個体。



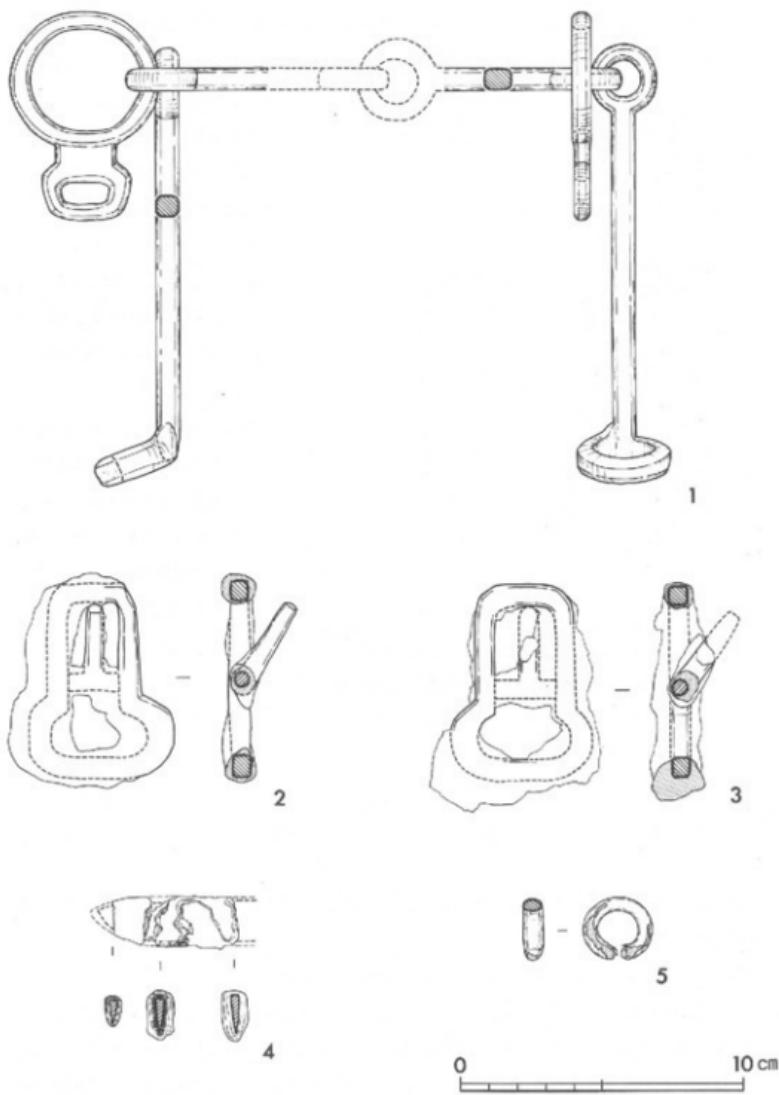
第9図 太田横穴群2号穴遺物実測図(2)

の輪状部分が、わずかに対称に偏ってふくらんでおり、一対でセットになるものと考えられる。全長7.0cm、革帶が通る部分の内幅2.0cm、梢円形の輪状部の内幅3.3cmである。T字形の刺金は、輪金の内側の枘穴に納まって上下動するものと思われる。刺金の長さは、欠失していないもので3.5cmを測る。馬具の一部として使われたものと考えられるが、使用された部位は不明である。

鉄斧は、かなり錆化が進んでいるが、袋状の銎を有する鍛造両肩式のものである。全長9.4cm、刃部幅4.8cm、袋部長径3.9cm、同短径2.1cm、同内法長径3.3cm、同内法短径1.5cmであり、袋部内には木質がつまっている。

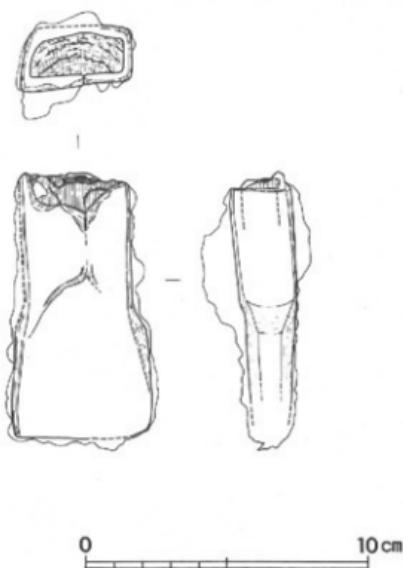
刀子は、1口出土しており、切先付近しか残存していない。現存長4.4cm、刃部断面は縦長の三角形を呈している。刃部断面には、木質が見え、それを巻くように漆皮が残存している。

金環は、銅製の環体に鍍金したもので、長径2.5cm、短径2.2cm、内径は1.3cmである。両端末に2.5mmの間隙がある。断面は梢円形で、長径0.8cm、短径0.5cmで中実式である。



第10図 太田横穴群 2号穴出土遺物実測図(3)

2号穴出土の遺物は、須恵器では、蓋環と平瓶、甕片と横穴墓出土遺物としては、通有のものであるが、馬具である轡、鉗具は、斐伊川流域の横穴出土遺物としては初例であり、注目される。



第11図 太田横穴群 2号穴出土遺物実測図(4)

また、轡1、鉗具2というセットも、県下では八束郡八雲村高野2号穴(注2)で認められており、乗馬に要する最低限のセットなのであろうか。また、高野2号穴と比較するならば、武器と呼びうるもののが、刀子1点であり、他に全く武器を有さないのも、この横穴の特色といえよう。(赤沢)

- 注1. 山本清「山陰の須恵器」  
(『山陰古墳文化の研究』  
所収、1971年)  
2. 東森市良他『高野2号横  
穴発掘調査報告書』(八雲  
村教育委員会、1980  
年)

## 小 結

以上、太田横穴群の概要について記述したが、最後にこの横穴群がもつ歴史的意義について若干の考察を加えて小結とする。

横穴の形態と掘削方法については、1、2号とも同様である。

玄室と羨道は幅に比べ奥行きが長く、玄室の断面が三角形を呈するテント形に属している。この形態の横穴は太田横穴群が位置する斐伊川中流域から上流域一帯に広く分布し、奥出雲地方の地域的特徴の一つとなっている(注1)。また、加工方法では仕上げ段階においてU字状刃先の工具を使用し、横方向を中心に削り、側面の界線では同工具を直角方向に打ち、その加工痕の

連續で界線が成立していることが知られた。奥出雲地方の横穴は発掘例が少なく、また、風化した花崗岩に穿たれているため、実態は不明であったが、今回の発掘によって詳細に加工方法を調べたことは成果の1つといえる。

埋葬方法に関わるものとして、玄室に人頭大の河石が数個配列された状態で遺存していた。この種の配石は、島根県邑智郡瑞穂町所花の江迫横穴群中の2穴で確認されており、人頭大の石を木板の土台とし、その上に屍を置いたものと推定している（注2）が、太田横穴群においても同様、木板か棺の台として使用したと考えられる。

構築時期は、出土した須恵器から、概ね山陰における須恵器編年の中古期（注3）に属し、蓋茶碗形のものが出現する直前と考えられる。それは古墳時代後期後半に該当し、7世紀前半に營造されたと思われる。なお、2号穴では、前庭部堆積土上層や羨道部床面直上出土の須恵器と玄室内のそれとでは前者と後者とにはほとんど形態の差はなく、追葬が短い期間の中で行われたことを示している。

出土品の中で、特筆すべきものに轡と鉸具がある。現在のところ、島根県で馬具をもつ横穴は8例が知られるが、太田横穴群2号穴を除くといずれも山陰地方東部に集中し、西部の斐伊川流域では初見であり、注目される。しかし、東部における6例においては、太刀をはじめ多量の武具や土器が認められるのに対し、太田横穴群2号穴では僅かな鉄器と少量の土器が出土しているのみである。この差異については今後の資料の増加を待って言及したい。

ところで、周辺部には栗谷横穴群（3穴）、大年横穴群（2穴）、大倉口横穴群（2穴）、森谷横穴群（2穴）が分布する。これらは三刀屋川や飯石川が形成する小規模な河岸段丘の縁辺部に位置し、規模・内部構造とも等質的であり、太田横穴群も含めこれらの横穴群の被葬者は、各段丘上の水田を生産基盤とした集団の長およびその家族員と考えられる。（西尾）

- 注1. 門脇俊彦「山陰地方横穴墓序説」（『古文化談叢』第7集、九州古文化研究会、1980年）
2. 今岡稔、吉川正、横山純夫「瑞穂・江迫横穴群」（『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ、島根県教育委員会、1974年）
3. 山本清「山陰の須恵器」（『山陰古墳文化の研究』所収、1971年）

## (附編) 周辺の遺跡と遺物

前項(歴史的環境)で略述したように、三刀屋町内には河岸段丘上を中心に数多くの遺跡が存在する。これらの遺跡および出土遺物を知ることは、この太田横穴群を理解するうえでたいへん重要なことはもちろん、それ以上に未解決の問題が山積みされている夷出雲地方の歴史を探るために欠くことのできない作業である。しかし、これらの資料はそのほとんどが未発表で、しかもその存在さえもほとんど知られていないのが実状である。そこでこの機会にその資料の一部を公表し、今後の研究のための基礎の一としたい。なお、これらの資料化については重富福太郎氏の多大なる御協力により、成し得たものである。ここに記して深謝したい。

### 浜 遺 跡 (三刀屋町殿河内)

三刀屋川左岸の段丘上に存在し、浜の集落の東および南側にある水田に位置する。1980年の圃場整備工事で発見された遺跡であり、東西125m×南北100mの範囲で縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器および石器が採集されている。

縄文土器には、早期後葉の植物繊維を混入したもの(内面は二枚貝による条痕5点とナデ4点の二種類がある)、後期初頭の縄文地に細めの沈線を施したもの(1点—中津式併行か)、晩期の口縁外面下に突帯を貼付け、ヘラ状工具で刻目を入れたもの(1点)等がある。

弥生土器には、壺か甕の底部が1点認められている。土師器としては、複合口縁をもつ甕と鼓形器台(小谷式)があり、古墳時代前期に属する。

須恵器には、古墳時代後期から奈良時代に属する蓋(輪状つまみをもつものも含む)、壺・皿・壺・甕等が認められ、また、同時期の土師器甕や高台を有す丹塗土器も相当量ある。

石器には安山岩製の石斧・黒曜石製石鎚と石核および頁岩製の石庖丁が各1個知られる。

### 樋原 遺 跡 (三刀屋町乙加宮)

三刀屋川右岸の舌状を呈す段丘上に存在し、樋原の集落西方の水田に位置する。1980年に行なわれた圃場整備工事で発見された遺跡で、東西150m×南北100mの範囲から縄文土器と石器が出土している。

縄文土器には、早期末から前期の二枚貝による条痕をもつもの(1点)、中期後葉の燃糸文を施したもの(2点—里木Ⅱ式)、後期前葉の沈線間に縄文を施したもの(4点—福田KⅡ式)、後期中葉のいわゆる縁帶文土器(2点—崎ヶ鼻式)および後期と推定される二枚貝による条痕調整を施

す粗製深鉢形土器（5点）等がある。

石器には陶面に使用痕をもつ磨石1個と円礫の両端を簡単に欠いた石錐7個以上が出土している。

みやうち  
**宮内遺跡（三刀屋町殿河内）**

三刀屋川左岸の段丘上に存在し、宮内の集落東側に位置する。1980年に行なわれた圃場整備工事で発見された遺跡であるが、遺構の多くは工事により壊されたものと推定される。

東西100m×南北350mの範囲から縄文土器・弥生土器・上師器・須恵器・土師質土器・瓦類および石庖丁・石錐が採集されている。

縄文土器には、早期末から前期に属する条痕土器（1点）、中期末頃の沈線文土器（1点）、後期の半精製土器（1点）と精製土器（2点）等があり、弥生土器には後期の壺が出土している。

須恵器には、古墳時代後期から奈良時代に属する壺・皿・盃・甕の破片が多く出土し、また、同時期に属する土師器甕の破片も認められる。

石器には頁岩製の石庖丁1個と花崗岩製の石錐2個がある。

特異な遺物としては、布目瓦3点が出土している。少量であるが、遺跡の性格を知る上で貴重な資料といえる。

あわだに  
**粟谷遺跡（三刀屋町粟谷）**

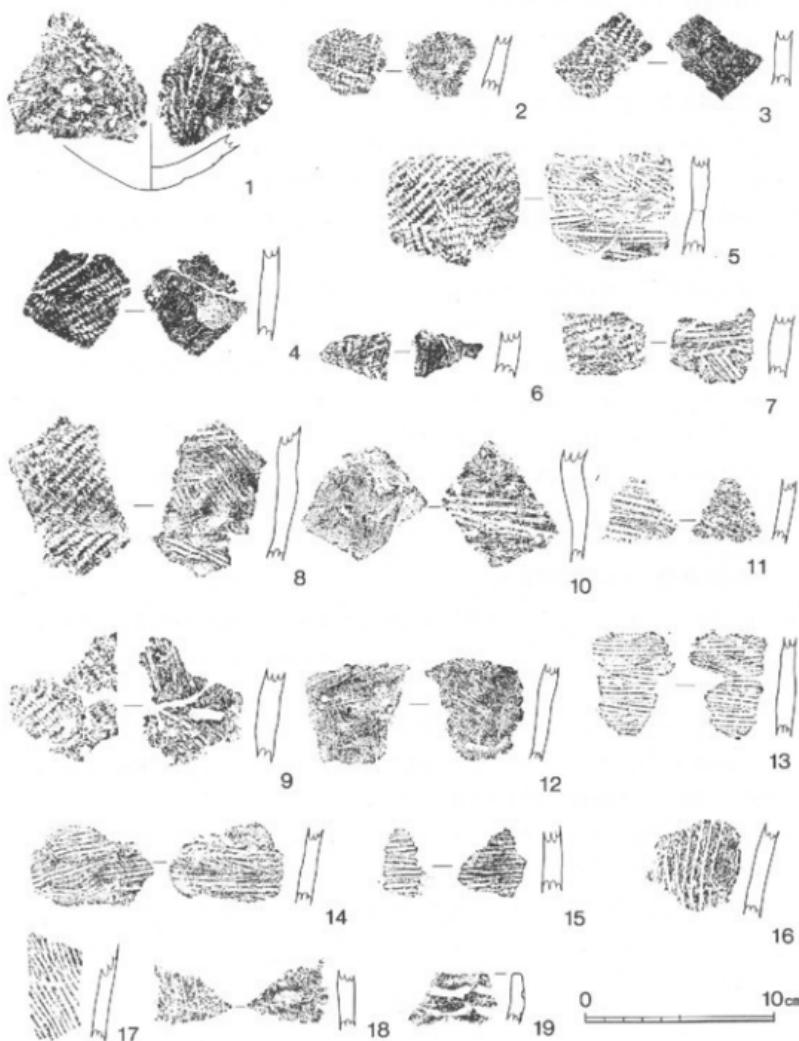
飯石川左岸の段丘上に存在し、三刀屋川との合流点付近に当る。1980年に行なわれた圃場整備工事で発見され、現在は水田として利用されている。遺跡の範囲は東西250m×南北100mで、表採されたものには、縄文土器・須恵器・土師器・土製支脚および石器がある。

縄文土器には早期末から前期と推定される条痕土器（3点）、後期で細かい縄文をもつもの（1点—福田KII式）、口縁端がやや厚くなり、沈線と縄文が施されたもの（1点—彦崎KI式か）、後期から晩期にかけての粗製土器（12点）等がある。

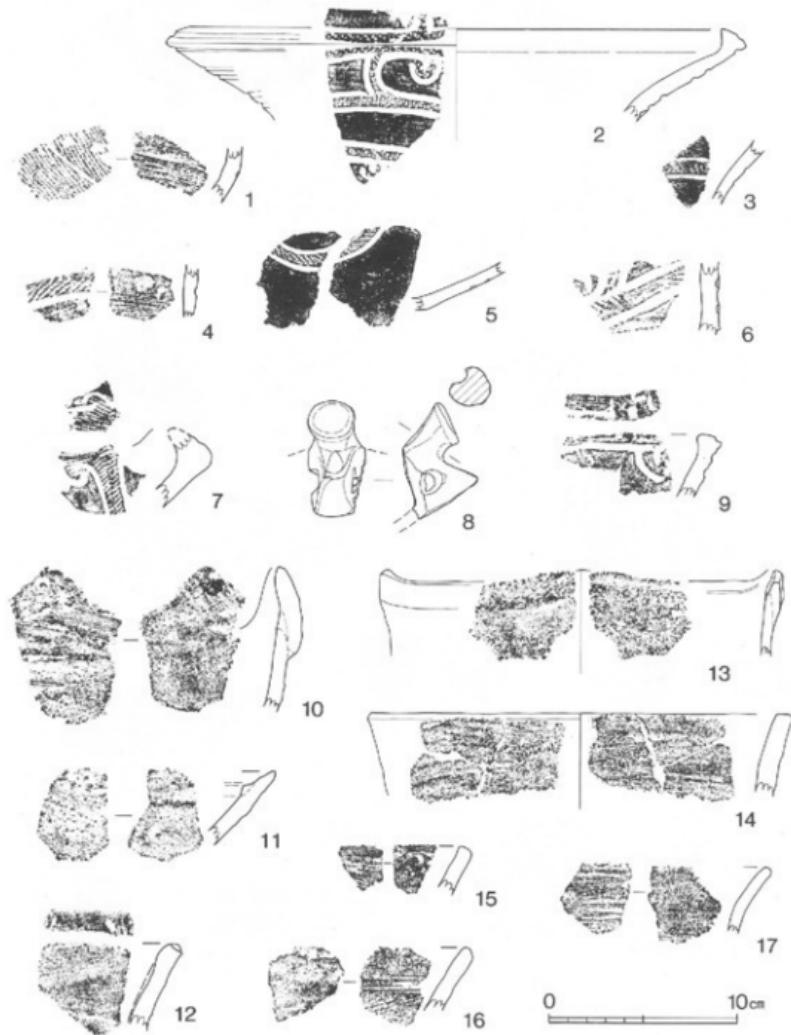
須恵器には奈良時代に属する壺・盃・皿・甕・甕の破片が多くあり、土師器には須恵器と同時代に属する丹焼の皿や甕の破片が認められる。

石器としては頁岩製のスクレイバー・安山岩製の石鎌および石錐が各1個出土している。

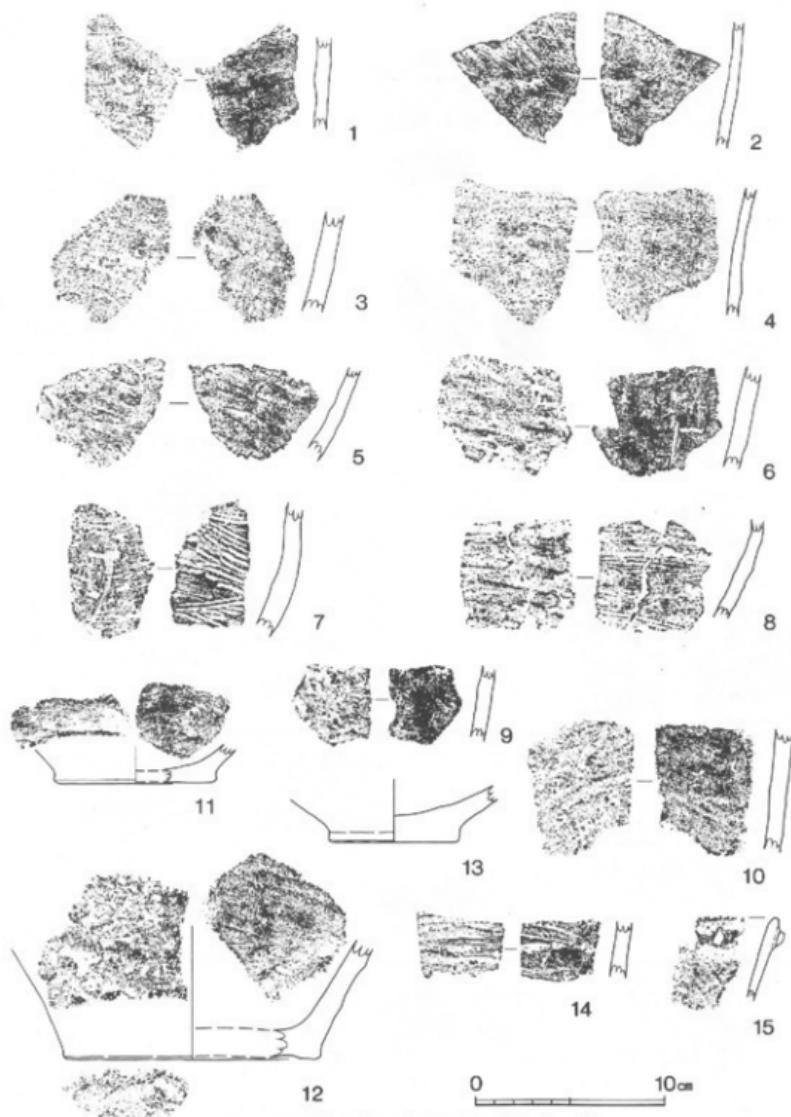
（足立、西尾、丹羽野）



第12図 周辺遺跡出土縄文土器実測図 (1) 早～中期  
(1～9浜、10・12～14・18栗谷、11・19宮内、15～17植原)



第13図 周辺遺跡出土繩文土器実測図（2）後期  
(1浜、2・4・6～8・15～17換原、3・5・9～12栗谷、13・14宮内)



第14図 周辺遺跡出土縄文土器実測図(3)後・晩期  
(1・2・5・15浜、3・4・6・7・9~12栗谷、8・14横原、13宮内)

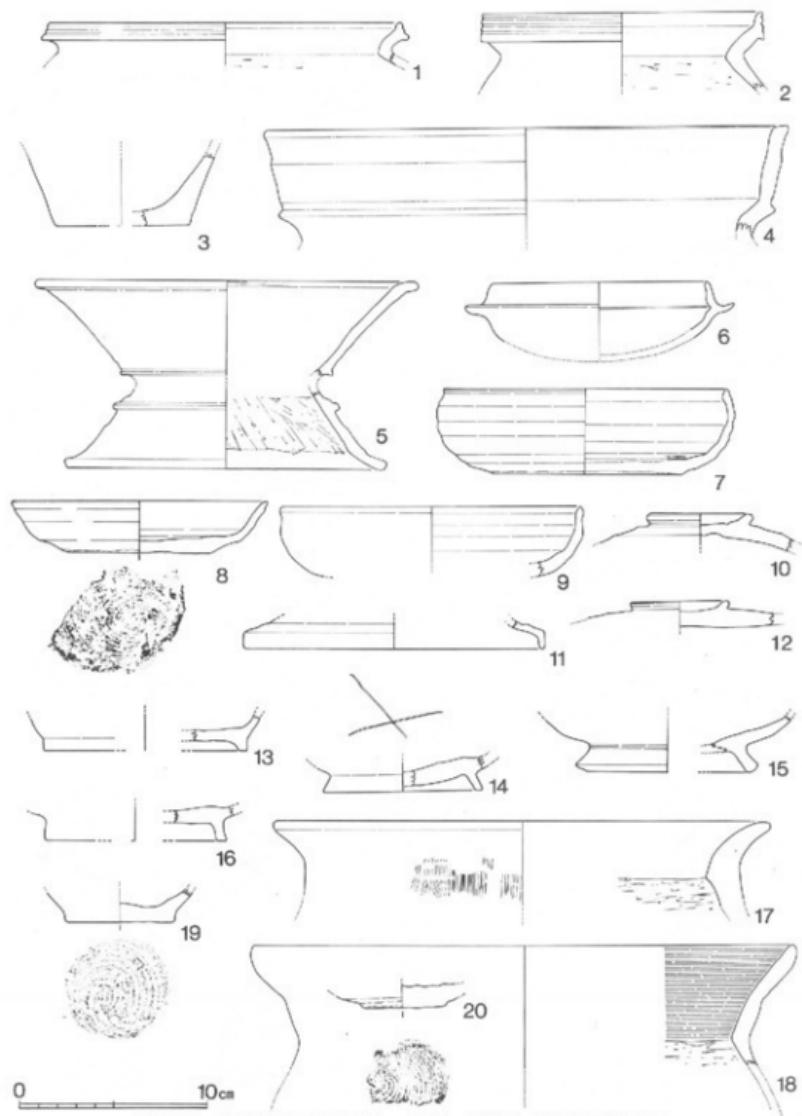
第3表 周辺遺跡出土縄文土器観察表

地図番号	時期(型式)	器種	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺跡
12-1	早期 後葉	深鉢	内外面ともにナデ。一部にヘラ状のものでナデ。外面に半月状の刺突文のようなものを施す。	1mm以下の小微砂粒多く含む。植物纖維少々含む。	良 好	灰褐色	浜
2	早期 後葉	深鉢	内面ナデ。 外面縦横に縄文。	微砂粒含む。 植物纖維わずかに含む。	やや良好	外面暗灰褐色。 煤状のもの付着。 内面灰褐色。	*
3	早期 後葉	深鉢	内面斜め二枚貝条痕のちナデ。外面縦横に縄文。	微砂粒多く含み、金雲母片もある。植物纖維混入する。	やや良好	灰褐色	*
4	早期 後葉	深鉢	内面ナデ。 外面縦横に縄文。	微砂粒多く含み、金雲母片もある。植物纖維混入。	やや良好	やや暗い 灰褐色	*
5	早期 後葉	深鉢	内面横位、斜めに二枚貝条痕。外面縄文。方向まちまち。	微砂粒含み、金雲母片もある。植物纖維多く含む。	やや悪く 少しもろい	内面灰褐色 外面黒褐色	*
6	早期 後葉	深鉢	内面二枚貝条痕。 外面縄文。	微砂粒、植物纖維多く含む。	やや良好	内面灰褐色 外面黒褐色	*
7	早期 後葉	深鉢	内面横位。右さがりに二枚貝条痕。外面縄文。	小微砂粒多く含み、植物纖維の大きいもの含む。	やや悪く 少しもろい	灰褐色	*
8	早期 後葉	深鉢	内面横位。右さがり二枚貝条痕。外面ナデのち縦位縄文。	2mm以下の小微砂粒多く含む。植物纖維混入する。	やや良好	灰褐色 ～黒褐色	*
9	早期 後葉	深鉢	内面右さがりの一枚貝条痕。 外面縦方向縄文。	1mm以下の小微砂粒含む。	やや悪く 少しもろい	内面灰褐色 外面くすんだオレンジ色	*
10	早末～ 前初	深鉢	内面横位ナデと二枚貝条痕。 外面ナデ。	砂粒多く含む。金雲母片あり。	やや良好	内面灰褐色 外面黒褐色	栗谷
11	早末～ 前期？	深鉢	内外面とも斜めに二枚貝条痕。内面一部にナデ。	小微砂粒多く含む。黒雲母片らしきものあり。	やや悪く 少しもろい	白っぽい 灰褐色	宮内
12	早末～ 前初	深鉢	内外面ともにナデ。外面に板目状の条痕はいる。	2mm以下の小微砂粒含む。金雲母片あり。かなり細い植物纖維状の痕跡あり。	良 好	内面暗褐色 外而暗い赤褐色	栗谷
13	早末～ 前期	深鉢	内外面ともに横位。二枚貝条痕。	2mm以下の小微砂粒多く含む。	やや良好	暗茶褐色	*
14	早末～ 前期	深鉢	内外面ともに横位。二枚貝条痕。	小微砂粒多く含む。	やや良好	灰褐色	*

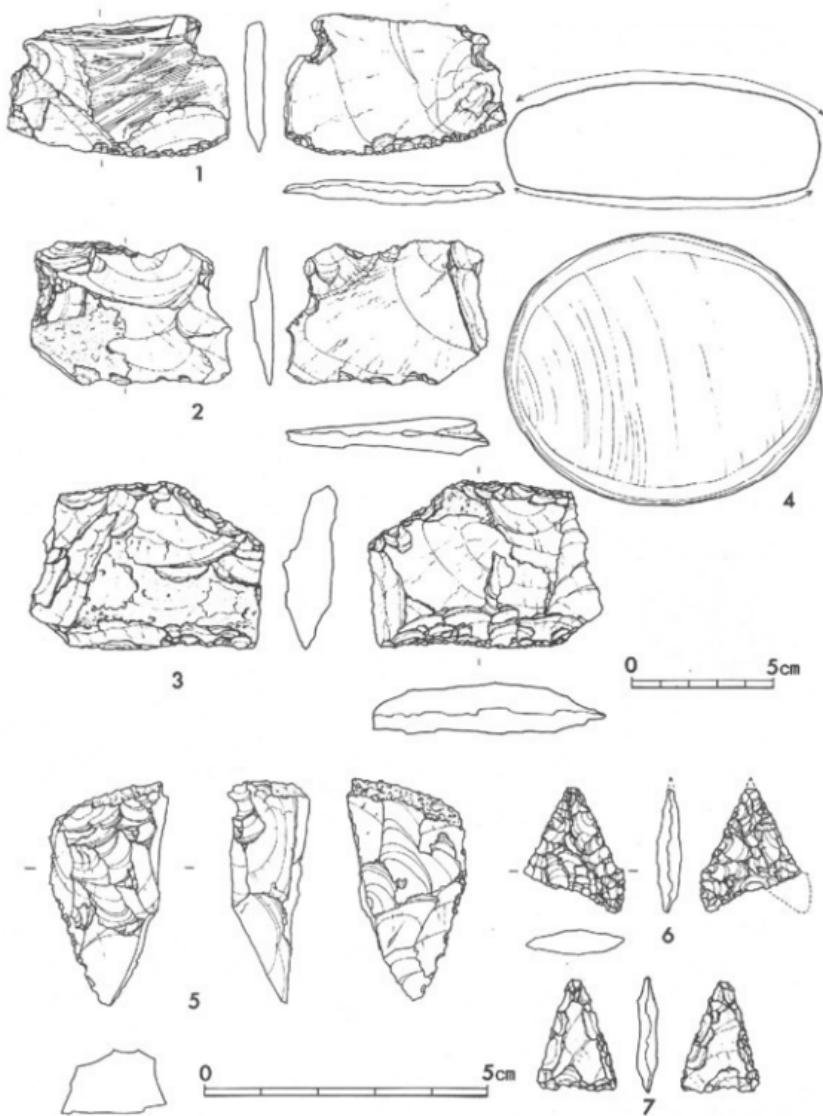
捕获番号	时期 (型式)	器種	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺跡
12-15	早末～ 前期	深鉢	内外面ともに横位、二枚貝条痕、のち内面かすかにナデ。	砂粒多量に含む。	やや良好	黄色さみ の灰褐色	植原
16	中期 里木Ⅱ 式	深鉢	内面ナデ。外面ナデのち 燃糸文。	2mm以下的小微砂 粒多量に含む。	良 好	暗灰褐色	*
17	中期 里木Ⅱ 式	深鉢	内面横位、ていねいなナデ。 外面斜×燃糸文。	2mm以下的小微砂 粒多量に含む。	良 好	暗灰褐色	*
18	中期 船元Ⅲ式 併行？	深鉢	内外面ともにナデ。外面巾 1mm程度の浅い沈線を入れ る。	微砂粒多く含み、 金雲母片も認められる。	やや悪く もろい	暗灰褐色	栗谷
19	中期末？	深鉢	全面ナデ。外面山線に沿っ て弧状に沈線を施す。	砂粒含む。	良 好	淡褐色	宮内
13-1	後期 中津併 行？	深鉢	内面ナデおよび二枚貝条痕。 外面細かい燃りの糸文をほ ぼ横位に施文したのち巾2 mm程度の沈線。	小微砂粒含む。	良 好 で か た い	暗灰褐色	浜
2	後期 福田K Ⅱ式	精製 深鉢	外面かなり良質の磨消糸文。 内面も研磨。	2mm以下の小砂粒 多く含む。	良 好 で 堅 緻	くすんだ 灰褐色	植原
3	後期 福田K Ⅱ式	精製 深鉢	内面研磨。外面磨消糸文。	小微砂粒多く含む。	やや良好	暗灰～ 黒褐色	栗谷
4	後期 福田K Ⅱ式 併行	精製 深鉢	内面横位ナデおよび二枚貝 条痕。外面は沈線間に糸文 を入れ、他はナデ調整のま ま。	小微砂粒多く含み、 黒雲母片もあり。	やや悪く やわらかい	やや赤味の ある黄褐色	植原
5	後期 福田K Ⅱ式	精製 浅鉢 ？	内面ていねいな研磨、外面 磨消糸文（糸文施文のち 沈線）、外面赤色顔料が塗 ってある。	3mm以下の小微砂 粒多く含む。	良 好 で か た い	内面黑色 外面赤褐色	栗谷
6	後期 福田K Ⅱ式 併行	精製 深鉢	内面ていねいなナデ、外面 ヘラ状のものでナデ、太い 沈線とその間に粗雑に糸文 を施す。	2mm以下の小砂粒 多量に含む。	やや良好	やや赤味を おびた灰褐色	植原
7	後期 福田K Ⅱ式	精製 深鉢	内面研磨、外面磨消糸文。 波状山線で、波頭部肥厚す る。内外面ともに赤色顔料 塗ったものか？	小砂粒少々含む。	良 好 で 堅 緻	灰褐色地で 赤～オレン ジ色	*
8	後期 彦崎K Ⅰ式 併行	精製 深鉢	円柱状の突起を持ち、三角 形に突出させた橋状把手、 突起、橋部上面を一部くぼ ませる。全面研磨。	小微砂粒多く含む。	良 好 で 堅 緻	灰褐色	*

掲番号	時期(型式)	器種	手法の特徴	胎七	焼成	色調	遺跡
13-9	後期 彦崎K 1式 併行	精製 深鉢	口縁端わずかに肥厚させる。内面研磨、外面ナデ調整で太めの沈窓と糊文を入れる。内面赤色顔料塗ったものか?	小微砂粒多く含み金雲母片もみとめられる。	良好で かたい	内面赤褐色 外面淡褐色	栗谷
10	後期	粗製 深鉢	口縁肥厚させ、全面にナデ。外面一部にヘラ状のナデ。	3mm以下の小微砂粒多く含む。	やや良好	内面淡赤褐色 外面淡黒褐色	"
11	後期?	深鉢	口縁内面に蔵帯貼付後、全面ナデ砂粒表面にかなり浮き出している。	4mm以下の砂粒多量に含む。	やや良好	暗灰褐色	"
12	後期?	深鉢	全面ナデ、口縁端部に断面半円形の刻目を施す。	微砂粒多く含み、金雲母片も多く認められる。	やや良好	暗茶褐色	"
13	後期?	深鉢	口縁肥厚させ、全面横位ナデ。	1mm以下の小微砂粒含む。	やや悪く 少しもろい	暗灰~ 茶褐色	宮内
14	後期	粗製 深鉢	全面ヘラ状のものでナデ。	小微砂粒多く含む。	やや良好	暗灰褐色	"
15	後期?		内面横位ナデ。外面斜めの二枚貝条痕のちナデ。	砂粒少々含む。	良好	やや褐色ぎみの暗灰色	植原
16	後期	粗製 深鉢	内面ナデのち二枚貝条痕。 外面ナデ。	大小の砂粒含む。	良好	暗オレンジ色	"
17	後期?		内面ナデ。外面ナデとヘラ状のナデ(あるいは巻貝の条痕か?)	1mm以下の小微砂粒多く含む。	良好	暗褐色	"
14-1	後~ 晩期?	深鉢	内外面ナデ、外面一部に板目状の条痕あり。	3mm以下の小砂粒含む。	良好で 堅	内面淡褐色 外面暗灰褐色	浜
2	後~ 晩期?	深鉢	内面ナデ、外面二枚貝風条痕のちナデ。	砂粒多量に含む。	良好で 堅	内面灰褐色 外面茶褐色	"
3		深鉢	内外面ともに横位ナデ。	微砂粒多量に含み金雲母片も認められる。	やや悪く もろい	内面灰褐色 外面赤褐色	栗谷
4	後期?	深鉢	内外面ともにナデ。	2mm以下の小微砂粒多量に含み、金雲母片も少々あり。	やや悪く 少しもろい	内面灰色 外面灰褐色	"
5	後~ 晩期?	深鉢	内外面ともにナデ。	3mm以下の小砂粒多量に含む。	良好で 堅	暗灰褐色	浜
6		深鉢	内外面ともにナデで、ヘラ状のものも使用する。内面にヘラのようなキズあり。	大小砂粒多く含む。	やや良好	灰褐色	栗谷

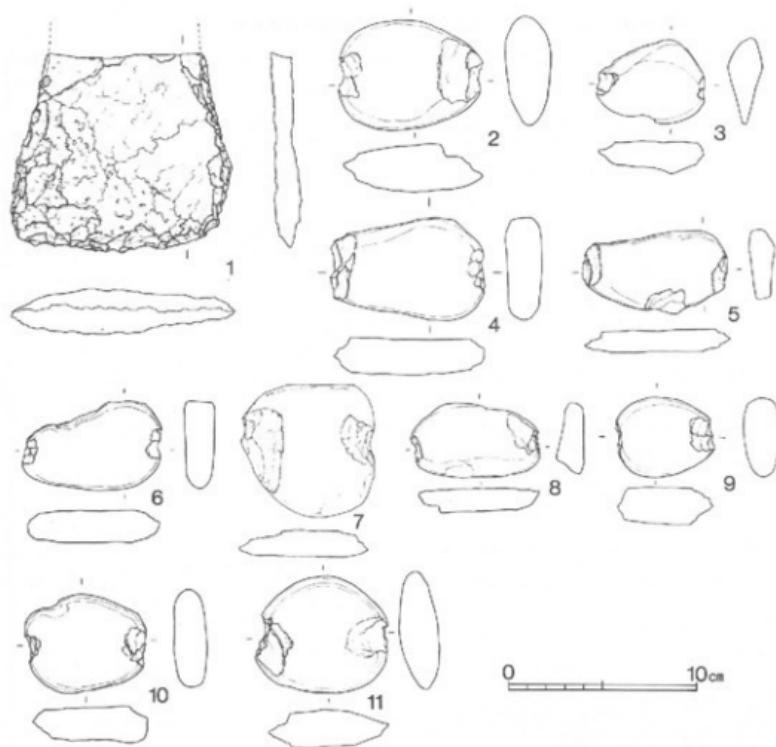
拂図 番号	時期 (型式)	器種	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺跡
14-7	後期	粗製 深鉢	内面横位～斜めに二枚貝条痕、中には半截竹管状のものもある。外面横位にケズり。	大小砂粒含む。	やや良好	赤味をおびた灰褐色	栗谷
8	後期？		内面横位二枚貝条痕。 外面横位ナデ。	大小砂粒多く含む。	やや良好	内面黒色 外面黄褐色	植原
9		深鉢	内外面ともにナデ。	1mm以下の小砂粒 少々含み、金雲母 も認められる。	やや良好で かたい	暗灰褐色	栗谷
10			内面二枚貝条痕、のちナデ。 外面ナデ。	3mm以下の小砂粒 多量に含む。金雲母片あり。	悪く もろい	茶褐色	〃
11	後～ 晚期	粗製 深鉢	内外面ともにナデ	小砂粒多く含み、 金雲母片も多く認められる。	やや悪く もろい	暗灰褐色 ～赤褐色	〃
12	後期	粗製 深鉢	内面斜めヘラナデ、底面ナデ。 外面ナデ。	2mm以下の小砂粒 多く、金雲母片も 多くあり。	やや悪く ちみつでない	赤褐色	〃
13	後期	半精製 深鉢	内面ケズリで一部にナデ。 外面研磨で底部周縁はのちナデ、底面ていねいなナデ(研磨風)。	大小砂粒多量に含む。	良好で 堅緻	灰褐色 ～黒褐色	宮内
14	後期	粗製 深鉢	内外面ともに横位ナデ。 一部ヘラ状のものあり。	2mm以下の小砂粒 多く含む。	良好で かたい	暗褐色	植原
15	晚期	深鉢	内面ナデ。 外面斜めの二枚貝条痕ののち突帯を貼付けてナデ。突帯上にヘラ状のもので划目。	3mm以下の小砂粒 多量に含む。	やや悪く もろい	灰褐色	浜



第15図 周辺遺跡出土弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器実測図  
(1・2・6・14・19宮内、3～5・10～13・15・17・20兵、7～9・16・18栗谷)



第16図 周辺遺跡出土石器実測図  
(1宮内、2・5・6浜、3・7粟谷、4積原)



第17図 周辺遺跡出土石器実測図（2）  
(1浜、2~8横原、9栗谷、10・11宮内)



第18図 宮内遺跡出土瓦実測図

第4表 周辺遺跡出土弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器観察表

岡番号	種別	時期	器種	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺跡名
15-1	弥生土器	弥生時代後期	圓形土器	口縁部凹線。内面ヘラケズリ。	1mm大の砂粒、金雲母含む	良好	淡黄褐色	宮内
2	"	"	"	口縁部沈線。内面ヘラケズリ。	1mm程の砂粒含む	"	黃褐色	"
3	"	"	"		微細	"	黒褐色	浜
4	土師器	古墳時代前期	"	内外面ヨコナデ。	細砂を含む	"	淡褐色	"
5	"	"	蓋形器台	外面ヨコナデ。受部内面ヘラミガキ。脚部内面ヘラケズリ。	砂粒を含む	"	"	"
6	須恵器	後期(身)	蓋坏(身)	内外面回転ナデ。	密	"	灰褐色	宮内
7	"	奈良時代	坏	内外面回転ナデ。糸切り底。	"	"	青灰色	栗谷
8	"	"	"	"	"	"	暗灰色	"
9	"	"	"	"	"	"	青灰色	"
10	"	"	蓋坏(蓋)	"	長石、石英を含む	"	灰褐色	浜
11	"	"						"
12	"	"	蓋坏(蓋)	外面回転ナデ。	粗い	不良	淡茶褐色	"
13	"	"	坏又は蓋	内外面回転ナデ。底部ヘラ切り。	密	良好	暗灰色	"
14	"	"	坏	外面回転ナデ。内面に×のヘラ記号。	大砂粒を含む	"	"	宮内
15	土師質土器	"	"	内外面回転ナデ。内外面丹塗り。	密	"	赤褐色	栗谷
16	須恵器	"	"	外面回転ナデ。	"	"	暗灰色	"
17	土師器	"	圓形土器	外面ハケメ後横ナデ。内面ヘラケズリ。	大粒の長石、石英を多く含む	"	赤黄色	浜
18	"	"	"	外面ハケメ。口縁部内外面回転ナデ。内面ヘラケズリ。	"	"	淡赤褐色	栗谷
19	土師質土器	中世	皿	内外面ナデ。底部糸切り。	砂粒を若干含む	"	淡褐色	宮内
20	"	"	"	内面回転ナデ。	密	"	淡茶褐色	浜

第5表 周辺遺跡出土石器観察表

番号	遺跡	種別	長さcm	幅cm	厚さcm	備考
16-1	宮内	石廻丁	7.8	5.1	0.8	頁岩製、片面に擦痕あり
2	浜	石廻丁 未製品か?	7.1	5.3	1.1	頁岩製
3	栗谷	スクレイパー	(8.2)	5.9	1.8	#
4	植原	磨石	11.1	9.7	4.1	両面に使用痕
5	浜	石核	7.9	3.8	2.8	黒曜石製、打面は自然面
6	#	石鎌	(2.4)	(1.75)	0.4	黒曜石製
7	栗谷	#	(2.0)	1.4	0.35	安山岩製
17-1	浜	打製石斧	(10.5)	11.8	2.1	#
2	植原	石錘	7.6	5.9	2.4	
3	#	#	5.8	4.9	1.9	
4	#	#	8.3	5.3	1.8	
5	#	#	7.8	4.4	1.4	
6	#	#	7.2	4.6	1.6	
7	#	#	7.1	7.1	1.4	片面に擦痕
8	#	#	6.8	4.1	1.4	
9	栗谷	#	5.1	4.2	2.0	
10	宮内	#	6.5	5.3	2.0	
11	#	#	7.0	6.3	2.1	

## 松本古墳群（三刀屋町給下）

松本古墳群（注1）は、飯石郡三刀屋町給下に所在し、前方後方墳1基をはじめ、円墳等4基からなる。この古墳群は斐伊川中流域三刀屋川の形成する比較的小規模な平野を東南に臨む低丘陵上に立地する。

### 松本1号墳

墳丘は約5.0mの前方後方形を呈し、埴輪、葺石などといった外部施設は有さない。

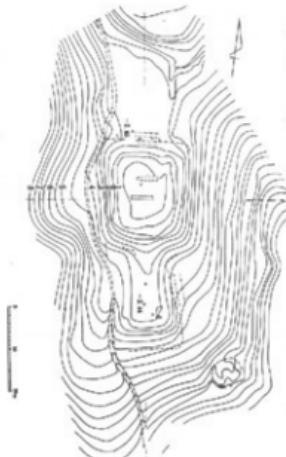
内部主体は、箱式の木棺を粘土で被覆した第1主体、割竹形木棺をやはり粘土で被覆した第2主体で、双方とも後方部上にはば東西を主軸として並列している。第1主体の長さは、約5.2m、第2主体は、約4.7mである。

遺物としては、第1主体からは、獸帶鏡1、ガラス小玉54、鉄製品、第2主体からは、鉄剣1、管玉1、鉄製品が出土している。

さらに前方部には、土師器大壺を切断してその破片で遺体を覆った一種の壺棺と考えられる第3主体がある。

その他、墳丘各部から土器片が多数発見されている（第19、20図）。これらは、山陰地方における古墳時代前期の良好な資料といえる。この資料は、壺、高环、器台、低脚环からなり、その大半を壺と高环が占める。壺のなかには近畿地方に起源を有し、前期古墳からしばしば検出される小形丸底壺（第19図1）や、複合口縁ながら口縁端部をわずかに折り曲げて内側に肥厚させる畿内布留式にしばしば見られる手法を有する個体（第19図3）があり、これらの土器が、畿内布留式に併行することは明瞭である。さらに高环脚のなかには、大きく八の字状に開き、穿孔を有するもの（第19図4）があるが、これには、やや口径小さく深い环部が接合していたものと考えられる。この器種は鳥取県地方にしばしば見られるもので、おおむね布留併行期内に出現、衰退するようである（注2）。

このような点から松本1号墳出土土器は從来から述べられるように畿内布留式に併行する時期の遺物と考えられるが、壺形土器の口縁端のシャープな平坦面、大きく張る肩部などの特徴は、安来市鍵尾遺跡資料や、四隅突出墓出土資料には見られないもので、供獻土器としてのセット関係



第18図 松本古墳群墳丘実測図  
(『調査報告』より転載)

でも鼓形器台の減少、高环の増加など、上記遺跡とは様相を異にしており、藤田憲司氏の説かれるように（注3）、いわゆる鍵尾式からは分離させて扱うべき資料であろう。

いずれにせよ、小平野しかもたない山間の地に前方後方という特異な墳形をもつ前期古墳が突如出現する点は、今後取り組まれるべき大きな課題といえよう。

#### 松本4号墳

この4号墳は、松本1号墳の前方部南東側に近接して存在する径約7mの円墳である。古く盗掘をうけたようであるが、本来は小形の横穴式石室をもっていたようである。調査者は南に開口する石室を想定している。出土遺物は須恵器環蓋各1と異形須恵器1である。須恵器蓋は、天井部に擬宝珠つまみを有し、内面には比較的高いかえりを有する。かえりは、部分的に口縁端部を結ぶ擦より下方に張り出す。天井部  $\frac{1}{2}$  以上に回転ヘラ削り調整が施され、内面天井部には一定方向のなで調整が見られる。环身は高い高台を有するもので、环部はやや浅く端部はわずかに外反気味に大きく開くものである。环外底部には回転ヘラ削りの後、回転なでを施している。

この环蓋は、以上の特徴より、山陰の須恵器編年ではⅣ期（注4）であるが、さらに細かくは、出雲国府出土須恵器編年の中第1形式（注5）、和泉陶邑窯の編年（注6）に照らすならば、Ⅲ形式2段階に相当するものであろう。実年代では7世紀後半、古墳時代最終末に位置付けられよう。

さて、もう一点の異形須恵器であるが、上面に陸を有し、その周囲に海がめぐっており、類例は知りえないが、小形の陶瓶と考えられる。折損はしているが、把手もつく異形の製品である。

このような陶瓶を副葬したこの松本4号墳被葬者は、當時数少なかったと考えられる識字層であり、この地域に勢力を有した官人像が想定できる。

（赤沢）

注1. 島根県教育委員会『松本古墳調査報告』 1963年

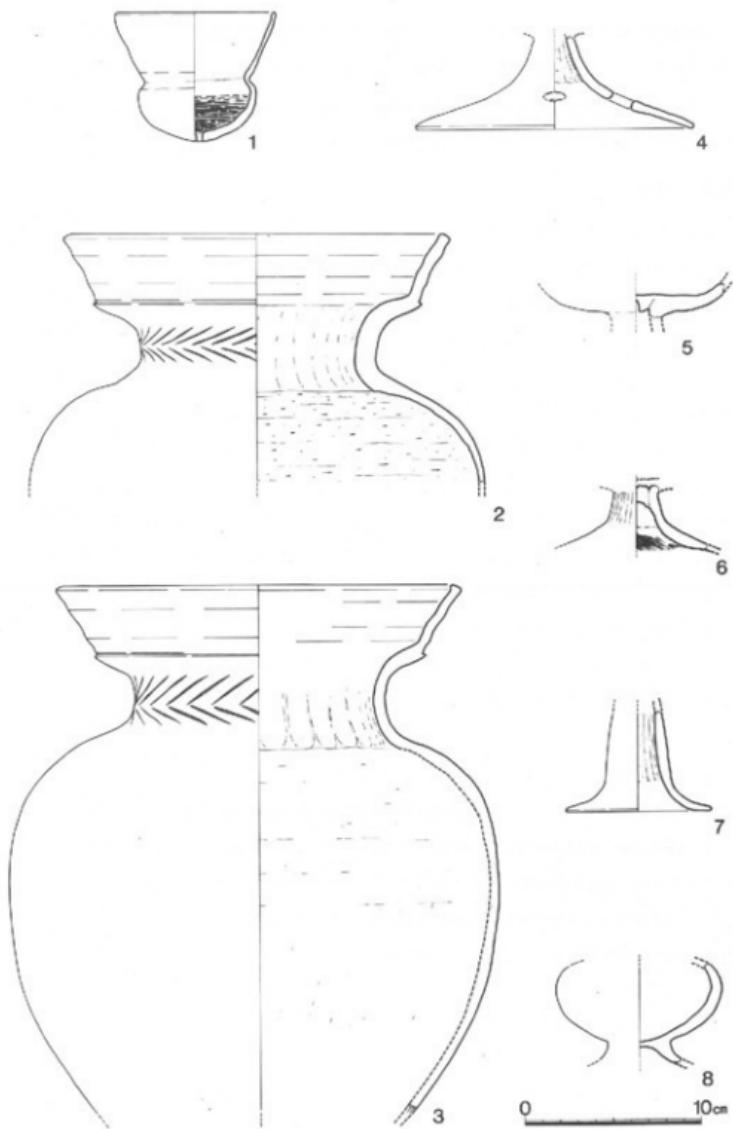
注2. 鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 1981年

注3. 藤田憲司「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」（『考古学雑誌』64-4）

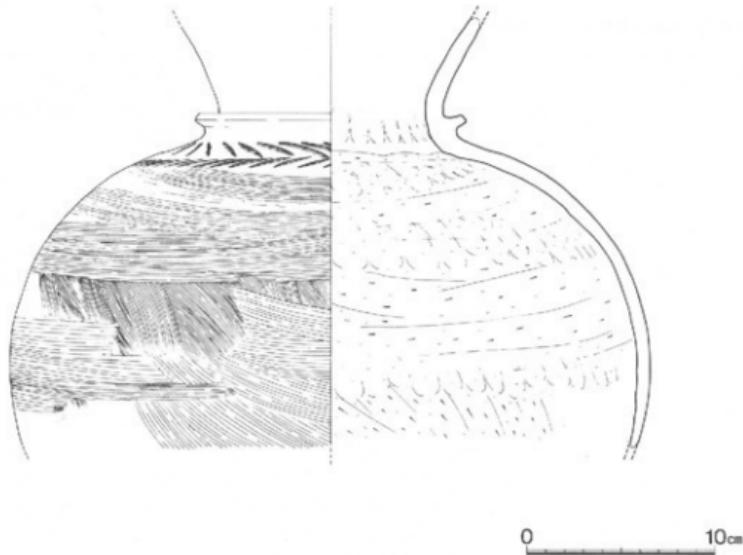
注4. 山本清「山陰の須恵器」（『山陰古墳文化の研究』所収 1971年）

注5. 松江市教育委員会『出雲国府跡発掘調査概報』 1970年

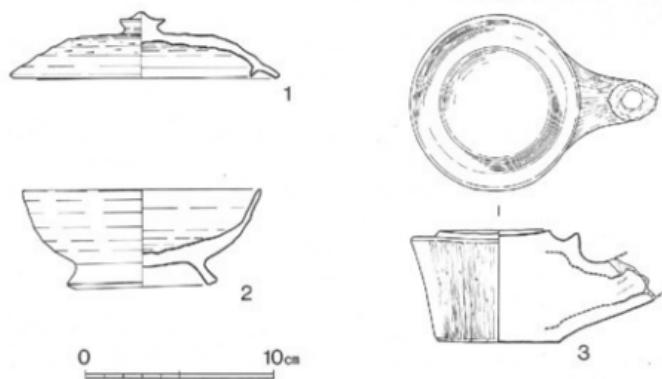
注6. 大阪府教育委員会『陶邑』Ⅲ 1980年



第20図 松本1号墳出土土器実測図 (1)



第21図 松本1号墳出土土器実測図 (2)



第22図 松本4号墳出土土器実測図

第6表 松本古墳群出土土器観察表

種類番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・色調	備考
19-1	小形 丸底壺	口径9.1 器高7.3	体部小さく、頸部しばみ直線的に開く、薄手の口縁部につづく。底部に径3mmの穿孔がある。	外面風化著しいがヨコなでか。内面上半ヨコなで。下半は荒いハケメが同心円状にめぐる。	石英・長石などを含む。 赤褐色。	焼成やや甘い。
2	壺	口径20.8 器高 -	肩部のよく張る胴部から大きくすぼむ頸部へ至り、複合口縁部を経て、直線的な口縁部となる。端部平端面をなす。	外面ヨコなで。口縁内面ヨコなで。頸部内面タテになで上げる。胴部内面ヨコ方向のヘラけずり。	石英・長石など目立つ。 赤味がかった 黄褐色。	焼成良好。 頸部に羽状文を有する。
3	壺	口径22.1 器高 -	肩部張り、やや丸味を帯びた倒卵形の胴部。大きくすぼむ頸部から複合口縁部を経て、直線的な口縁部に至る。端部平坦面をなし、わずかに内側に肥厚する。	外面ヨコなで。口縁内面ヨコなで。頸部内面タテになで上げる。胴部内面上半はヨコ方向のヘラけずり。下半はタテ方向のヘラけずり。	石英・長石など含む。 黄褐色。	焼成やや甘い。 口縁部に黒斑をもつ。 頸部に羽状文を有する。
4	高环脚	脚径15.8 器高 -	低く、大きく開く脚部。13mmの円形透しがある。	内外面とも風化著しく、調整不明だが、脚内面上部には、ヘラけずりがある。	石英・長石・金雲母など多い。 乳白色。	焼成やや甘い。
5	高 壕	-	平らな壺底部。	風化著しく調整不明。壺底部に脚接合のための小穴が残る。	石英・長石など含む。 淡褐色。	焼成普通。
6	高 壕	-	低い高环脚部。短い脚柱部から屈曲して大きく開く脚底部を有する。	外面なで調整。脚柱部にタテ方向のヘラみがき。内面なで調整。脚底部にはハケメが各方向に施される。脚柱内に粘土をつめて壺部と接合する。	石英・長石などの微砂粒を含む。 灰白色。	焼成良好。
7	高 壕	脚径8.2 器高 -	高い高环脚。円柱状の脚柱からわずかに開いて脚端となる。	内外面とも風化著しいが、脚柱内面ヘラけずり。	石英・長石など含む。 赤褐色。	焼成やや甘い。

括弧 番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・色調	備考
19 8	台付 小壺か	-	扁平な球状の体部を有し、その直下からすぐに開く脚を有する。	風化著しい。	石英・長石などを含む。 乳白色。	焼成普通。
20	壺	-	やや扁平な球状の胴部。頸部にタガ状の突帯がめぐる。頸部から直線的に開く口縁部が伸びる。	口縁部外側ヨコなで。胴部外側細かい目のハケメを施したのち、荒く、太いハケメを施す。胴部内面はヨコ方向のヘラけずり。外面のハケメと対応すると考えられる指頭圧痕が残る。	石英・長石の他、金雲母を含む。 淡褐色。	焼成良好。 頸部下に羽状文を有する。
21-1	須恵器 蓋	口径 14.3 器高 3.6	天井部に扁平な擬宝珠つまみを有する。内面には比較的高いかえりをもつ。	天井部 $\frac{1}{2}$ 以上に回転ヘラけずりを施す(クロ回転右)。内面天井部にて調整。他は回転なし。	胎土密。 灰白色。	焼成良好。
2	同 壺	口径 12.6 器高 5.3	高い高台を有する。壺部はやや浅く、端部は外反気味に開く。	壺外側底部は回転ヘラけずりのち回転なしでを施す。壺内側底部はなで調整。他は回転なし。	胎土密。 灰白色。	焼成良好。
3	陶 砥	口径 8.9 器高 6.0	上面に円形の陸をもち、それを窓状の窓池がめぐる。上面が開く円柱状を呈し、折損しているが把手をもつ。	上・下面是なで。側面および把手はタテ方向のヘラみがき。	胎土密。 青灰色。	焼成良好。

### 森谷横穴群（三刀屋町多久和字森谷）

飯石川の一支流である森谷川が形成する小谷の北側斜面に位置し、現在、A群、B群の2支群に分かれ、各々横穴1穴が現存する。周辺には飯石川河岸段丘上に、縄文時代から奈良時代へと続く森谷、京殿、宮田、王神谷遺跡が分布している。

#### A群1号穴

飯石川と森谷川の合流点より約20m程奥に入り、水田面より比高約10m上方に位置する。数メートル離れた地点にもう1穴存在していたらしいが、現在は崩壊しており確認できない。

開口は1931年で、剥落が甚だしい。プランは継長を呈し、南西方向に開口する。規模は約1.4m、高さ約1mであり、この地域によくみられる三角形断面妻入形式にあたる。

入口部はかなり崩れているが、玄室部と羨道部は明確な区別がなく、玄室が長く伸びる形状を示す。閉塞施設は不明である。

出土品には須恵器の坏4、蓋6、壺1、高坏片、長頸壺があった。

#### B群1号穴

森谷横穴群A群より約100m程谷の奥に位置し、水田面より比高約10m上の山腹に存在する。

内部は剥落が著しく、かろうじて側壁、天井の一部が原形をとどめているにすぎない。入口部は崩壊しており、羨道部の状態は全く判らないが、玄室は継長方形プランと推定され、南東方向に開口する。幅は約1.8m、高さ1.3mを測り、三角形断面妻入形式にあたる。

出土品にはメノウ製の勾玉が現存するが、発見当初出土したと伝えられる須恵器等は散逸している。

### 粟谷横穴群（三刀屋町粟谷）

粟谷横穴群は飯石川と三刀屋川の合流点の南側斜面に位置する。現在、粟谷神社の下方の道路傍に3穴、神社裏側斜面に1穴が南西方向に開口し、神社下方の3穴を北より1～3号穴、神社裏側の1穴を4号穴と呼ぶ。このうち1、2号穴は剥落が甚だしく、今回は3、4号穴を紹介する。各横穴とも開口は1920年代後半にあたる。

なお、多くの遺物は散逸し、現在、その一部が粟谷神社に保管されている。

周辺には、飯石川と三刀屋川が形成する河岸段丘上に縄文時代から奈良時代へと続く遺跡が分布し、対岸にも横穴が存在している。

#### 3号穴

花崗岩質の山肌に穿たれた横穴で、剥落が著しく、奥壁、側壁、玄門の一部を残すのみである。

玄室プランは縦長長方形で、南西方向に開口する。規模は幅約 1.9 m、長さ約 3.2 m、高さ約 1.5 m を測り、三角形断面妻入形式にあたる。

羨道も一部を残すのみであるが、幅約 1.3 m、高さ約 1 m を測り、比較的幅が広いままで伸びていく。出土品は不明。

#### 4号穴

神社の裏側に開口し、1～3号穴より約 1.0 m 上方に穿たれている。他の横穴と同様に花崗岩質の山肌に穿たれたもので、剥落が著しい。玄室プランは縦長長方形を呈し、南西方向に開口する。規模は幅約 1.7 m、長さ約 3.2 m、高さ約 1.8 m を測り、天井は奥にいくほど高くなっている。形状は三角形断面妻入形式にあたる。

羨道は一部を残すのみであるが、幅は約 0.9 m を測り、3号穴と比べて細長く、天井部はかなり低いところに穿たれている。出土品は不明。

#### こうじろ 神代横穴（三刀屋町神代）

飯石川を源ること約 8 km の三刀屋町神代に位置する。谷合には、わずかな平坦面が形成されており、その平坦面を臨む、比高約 2.0 m の急斜面に一穴のみ東南方向に開口する。飯石川流域には、現在多くの横穴が知られているが、多くは多久和、栗谷に存在しており、神代ではこの横穴しか発見されていない、また周辺には遺物散布地も見つかっていない。

神代横穴は、1972 年に柔園開墾中に発見され、調査が行なわれたものである。この際、横瓶 1、つまみを有する須恵器蓋 2、土師器环 2 が発見されている。

報告書によれば、玄室と羨道（注 1）の区別がなく、閉塞施設までの長さは約 2.90 m、奥壁の幅約 1.0 m、閉塞部の切り込みの幅約 0.65 m、高さ約 0.82 m を測り、閉塞部付近でわずかに細くびれる。幅に比べ、奥に著しく長い形態を示す。

須恵器の時期は、出雲国庁須恵器編年第 3 形式の指摘があり（注 2）、和泉陶邑窯の編年では N 型式 2 段階にあたる（注 3）。土器は一型式内に相当すると思われる。横穴墓室剖面と一致すれば、神代横穴は、古墳時代最終末に位置づけられよう。

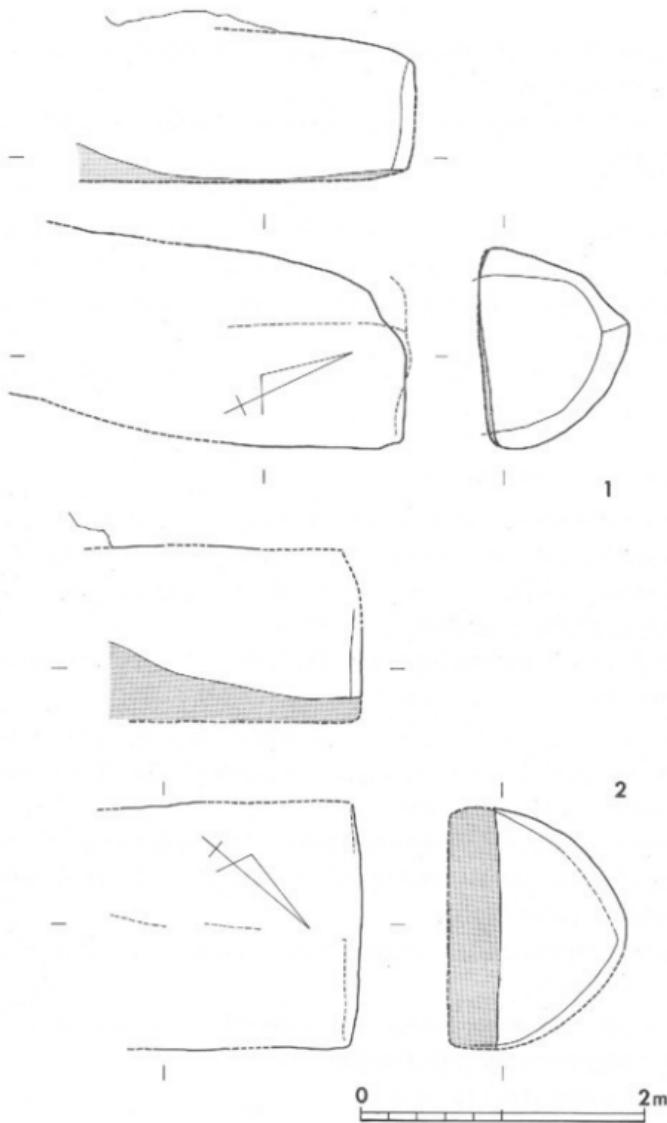
なお、神代横穴と類似形態のものは、当地域に数例見られ、その遺物より横穴墓造の最終末に出現するものと考えられる。

（稻田）

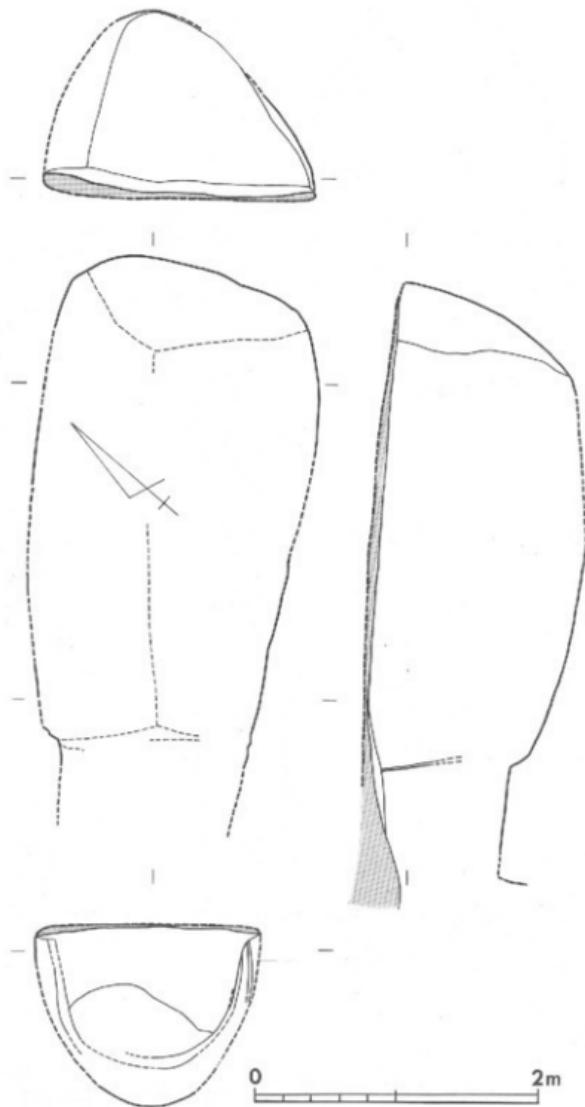
注 1. 廣岡法暉「三刀屋神代横穴」（『島根県埋蔵文化財調査報告書』第 1 集 1969）

注 2. 松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』1970

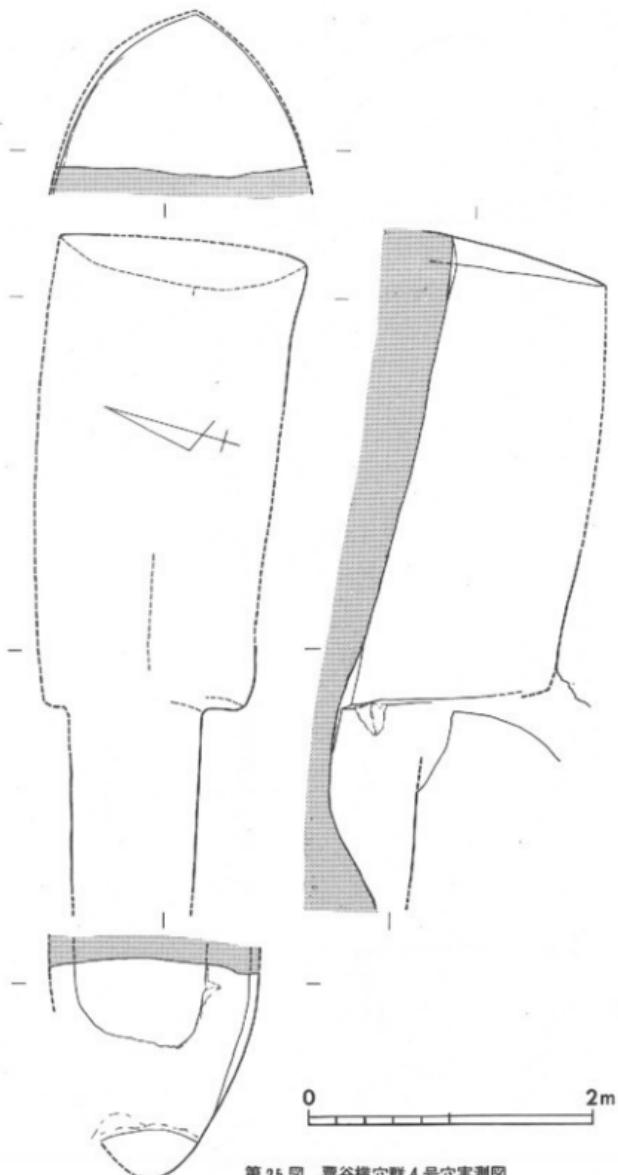
注 3. 大阪府教育委員会『陶邑』Ⅲ 1980



第23図 森谷横穴群実測図  
(1. A群1号穴、2. B群1号穴)



第24図 栗谷横穴群3号穴実測図



第25図 粟谷横穴群4号穴実測図

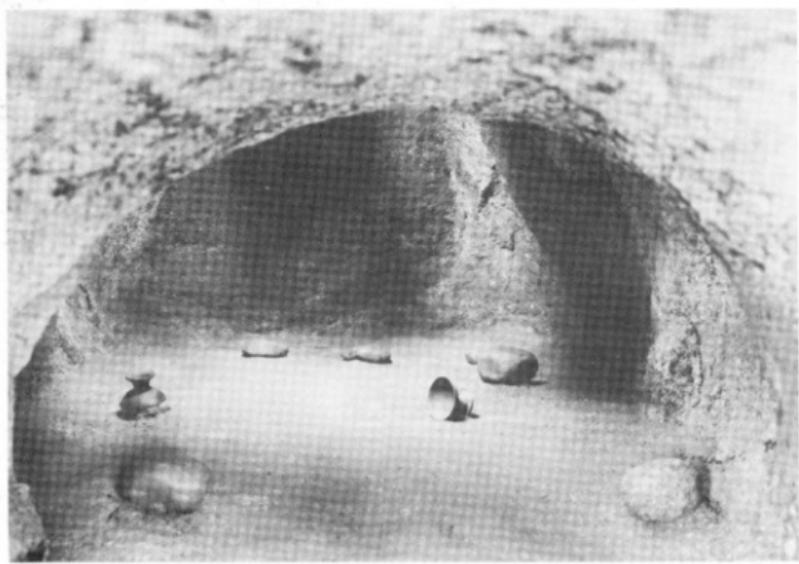
# 図 版

太田横穴群遠景・1号穴

図版 I



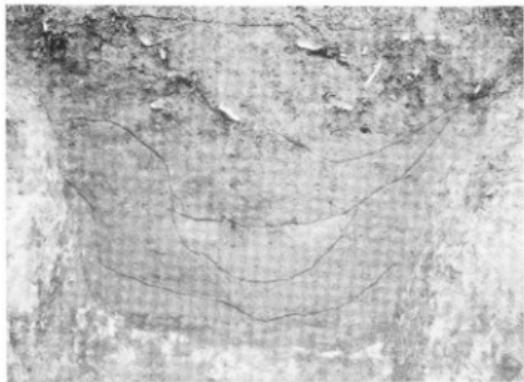
太田横穴群遠景（北から；○印に横穴群が存在する）

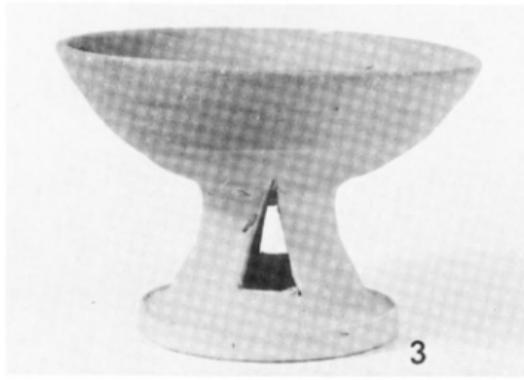
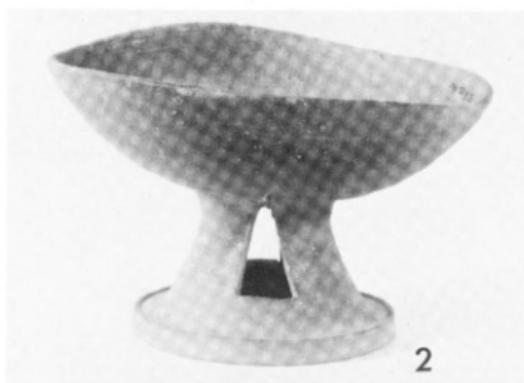


玄室内

太田横穴群1号穴

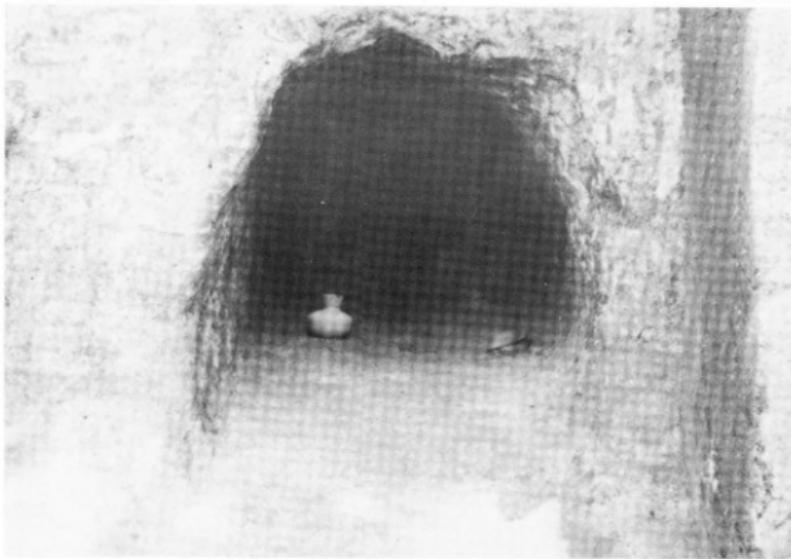
図版 II





太田横穴群 2号穴

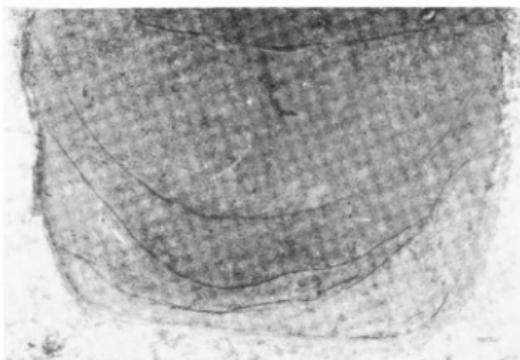
図版 N



後道部入口付近



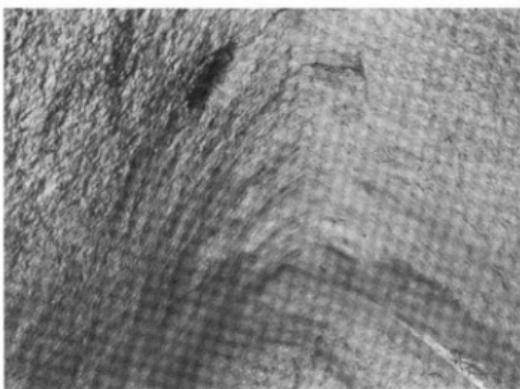
玄室内(1・2鉸具、3轡、4鐵斧)



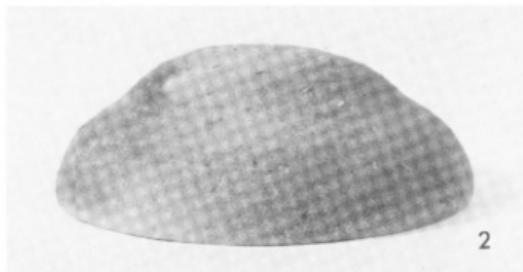
前庭部横断面



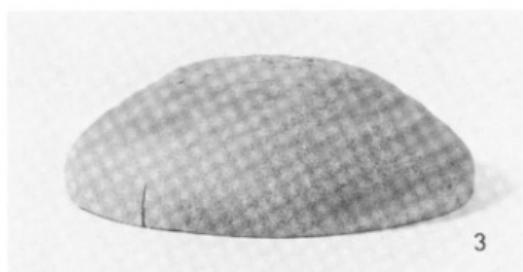
側壁・工具痕



天井・工具痕



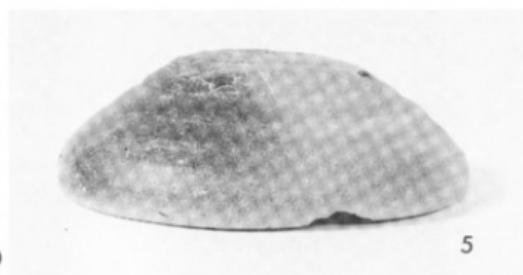
2



3

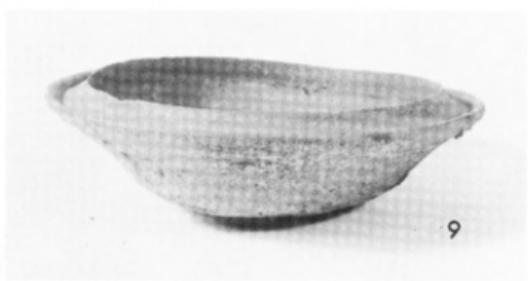
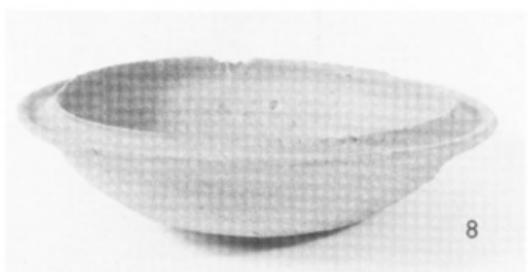
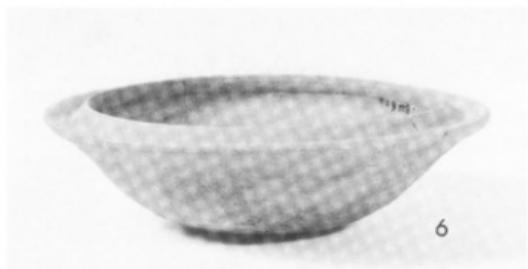


4



5

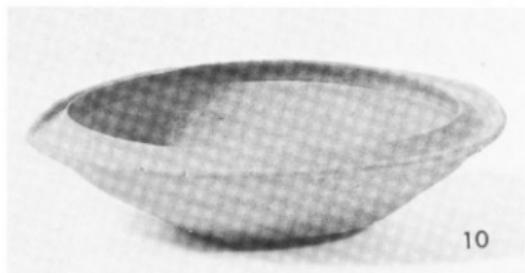
出土遺物(1)



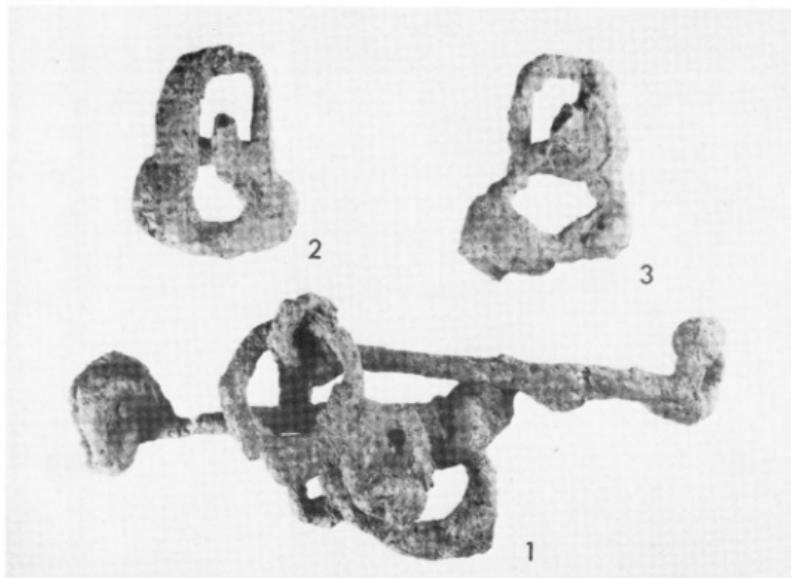
出土遺物(2)

太田横穴群 2 号穴

図版録



出土遺物(3)



1 鎏、2・3 鉸具



出土遺物(4)



金 環

太田横穴群発掘調査報告書

1982年9月

発行 三刀屋町教育委員会

印刷 有限会社 黒潮社

卷之三

卷之三